

剣野山縄文遺跡群

——新潟県柏崎市・剣野B遺跡確認調査報告——

1990

柏崎市教育委員会

剣野山縄文遺跡群

—新潟県柏崎市・剣野B遺跡確認調査報告—

1990

柏崎市教育委員会

序

剣野山繩文遺跡群は、その発見から40有余年を経て様々に取り上げられ、昭和50年の市の史跡指定以後は柏崎の歴史が始まった遺跡として市民にも親しまれてきた。それからすでに10数年の時が流れ、人も社会も目まぐるしく変化するのも当然のことかも知れない。山野に囲まれ物静かであった剣野山も、周辺は宅地に囲まれ、新しい道路が整備されるなど昔日の面影も僅かにとどめるのみである。

A～Fまでの6遺跡で構成されるこの遺跡群は、A・E・Fの3遺跡が史跡指定以前に半廃もしくは消滅を余儀なくされ、保存状態が良好とされるのはB・Dの2遺跡を残すのみである。遺跡は、それのみにては成り立たず、周辺の山野あって、その意義を持つ。しかし、土地の有効な活用という観点からは、必ずしも妥当とは言えなくなったのは、やはり時代の移り変わりであろうか。

本報告書は、遺跡の保護と土地の有効利用を意図し、遺跡の範囲とその性格を明らかにすべく実施した剣野B遺跡確認調査の記録である。

調査の成果は、第一に繩文集落の存在を確認したことである。さらに古代の鍛冶遺構や中・近世の塚群など、数千年にわたる人々の痕跡を知ることができた。この成果が、地域の歴史理解の一助となり、また遺跡の保護のため活用されれば、この上もなく幸いなことと考える。

最後に、盛夏の中、杉・松・雜木やススキの藪に見え隠れしつつ確認調査に参加された、高齢者事業団シルバー人材センターの会員の皆様並びに調査員の方々に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

平成2年3月

柏崎市教育委員会

教育長 山田恒義

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字櫻杷島字岩ノ原地内に所在する剣野B遺跡に対して実施した確認調査の記録である。剣野B遺跡は、他のA・C・D・E・Fの5遺跡とともに「剣野山鶴文遺跡群」と総称され、昭和50年に柏崎市の史跡に指定された。
2. 確認調査は、国と県の補助金を導入し、柏崎市教育委員会が実施した。
3. 確認調査は、平成元年8月に、(社)柏崎市高齢者事業団シルバー人材センターの会員から協力を得て実施した。整理・報告作業は、柏崎市西本町3丁目喬柏園内遺跡調査室において行った。
4. 確認調査にともない出土した遺物は、「ケンノ」にグリッド名や遺構名等を併記し注記した。また、出土遺物は、一括して柏崎市教育委員会が保存・管理し、喬柏園内遺跡調査室において保管してある。
5. 遺構・遺物の実測及び写真撮影並びに挿図の作成は、調査員や整理員の御協力を得て、調査担当の品田が行い、報告書の執筆及び編集も合わせて行った。
6. 確認調査に当たっては、多くの土地所有者の方々から多大なる協力を頂くとともに、調査から報告書作成に至るまで、下記の諸機関等から御指導及び御助言を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

上杉　清・上杉光三郎・内山静夫・大島正基・小竹一雄・坂井秀弥・品田康雄
清水礼史郎・田辺嘉栄・高橋昌子・高橋　保・寺崎裕助・中村鎮夫・中村益郎
中村勲一・三井田忠明・渡辺朋和・佐藤正志・石川昌清
新潟県教育庁文化行政課・柏崎市史編さん室

調　　査　　体　　制

調査主体　柏崎市教育委員会（教育長　山田恒義）

總　括　飛田　瑞穂（社会教育課長）

管　理　小林　清輔（社会教育課長補佐）

花井　憲雄（社会教育課社会教育係長）

庶　務　阿部せつ子（社会教育課副参事庶務係長事務取扱い）

調査担当　品田　高志（社会教育課社会教育係学芸員）

調　　査　　員　小野塚徹夫

調査補助員　竹井　一（社会教育課嘱託）

発掘作業　池島増雄・植木久敏・上野　昇・金子義司・小林秀雄・持田　盛

矢島末吉・横田幸夫・春日　保・田辺行雄・高野甲治

整理作業　帆刈敏子・大野博子・黒崎和子・星野京子・牧野博美・岩下清美

目 次

I 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 確認調査の経過	2
II 環 境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	5
III 剣野B遺跡概観	8
IV 調査区の概要	10
1 発掘区と概観	10
2 発掘区と遺構概観	10
a 西 地 区	
b 東 地 区	
3 塚 群	14
V 遺 物	16
1 繩文時代	16
a 繩文土器	
b 石 器 類	
2 平安時代	24
a 土師器	
b 須恵器	
c 鉄 淬	
VI ま と め	26
1 繩文集落とその変遷	26
2 鍛冶遺構の年代と鉄生産関連遺跡	29
引用・参考文献	(30)

図版目次

- 図版1 剣野B遺跡とその周辺（航空写真）
- 図版2 剑野B遺跡 a.遠景(西から) b.近景(西から) c.近景(南西から)
d.近景(北から)
- 調査スナップ e.O—14トレンチ f.O—16トレンチ g.剣野山1号塚
h.I—14トレンチ
- 図版3 調査区検出遺構1 a.D—13トレンチ b.I—14トレンチ c.C—16⑤
d.D—15② e.D—16② f.D—16② g.F—17① h.G—17①
- 図版4 調査区検出遺構2 a.E—19⑤ b.B—18⑤ c.C—18⑤ d.E—18①
e.E—18⑤ f.A—19⑤ g.B—19⑤ h.B—18①
- 図版5 調査区検出遺構3 a.B—14. SK—1 b.D—13. SK—1 c.J—19. SR—1
d.J—19. SX—9 e.f.L—14. SI—1 g.M—13. SR—1
h.P—20トレンチ
- 図版6 剣野山塚群第1号塚 a.b.現況(北半部) c.③トレンチ d.①トレンチ
e.②トレンチ f.④トレンチ g.②トレンチ検出遺構
剣野山塚群第2号塚 h.⑤トレンチ
- 図版7 繩文時代の遺物1 a.繩文土器1 b.繩文土器2
- 図版8 繩文時代の遺物2 a.繩文土器3 b.繩文土器4
- 図版9 繩文時代の遺物3 a.繩文土器5 b.繩文土器6
- 図版10 繩文時代の遺物4 a.繩文土器7 b.石器類(磨製石斧・打製石器・剣片ほか)
- 図版11 繩文時代の遺物5 a.石器(石錘) b.石器(磨石他)
c.D—13. SK—1出土大石
- 図版12 平安時代の遺物 a.土師器 b.土師器 c.土師器・黒色土器・須恵器 d.鉄滓

表目次

繩文土器出土位置一覧表	23
-------------	----

I 序 説

1 調査に至る経緯

調査前史 剣野周辺における遺跡発見の契機は、戦後間もない昭和22～23年頃の食料事情悪化に際して実施された山野の開墾にあった。当時結成されて間もない「柏崎先史考古学研究会」は、剣野山一帯を主なフィールドとして遺物等の採集などの活動を行っていた。その成果のひとつが、同会メンバーの一人であった水地正吉氏の作図した「剣野遺跡地図」である〔柏崎市史編さん委員会編1987〕。当地図には、A～Eまでの5地点が記載されており、それらに剣野を冠して呼称された。その後、剣野F地点が柏崎市立第三中学校敷地造成中に発見され〔宇佐美・寺崎 1987〕、計6か所で構成される遺跡群として把握されることとなった。

しかし、剣野A遺跡は、昭和30年頃に自衛隊が演習と称して数mを削平し、その後新潟県立柏崎農業高等学校の実習農場となるなど大半が破壊されている。また剣野E遺跡も昭和50年頃までに順次宅地化等がなされ、そのほとんどが消滅を余儀なくされている。このような状況下、剣野D遺跡にも墓地公園造成の開発計画が持ち上がった。しかし、すでにA・E・Fの各遺跡の大半が失われていたこともあってか、保存の機運が高まって開発は中止となり、これを契機に昭和50年「剣野山繩文遺跡群」としての史跡に指定された。剣野E遺跡は、昭和58年の県教委による分布調査で一部現存していることが確認された。その直前に剣野A遺跡は、僅かに残されていた縁辺の斜面部分が宅地造成に伴う工事により削平されていたが、事前に実施した確認調査及び発掘調査では、すでに史跡としての意義が失われていたことが確認されている〔品田・鈴木 1987〕。本遺跡群は、この外にも道路改良工事等いくつかの開発が計画される度に、小規模な事前調査が実施され、それらの一部については報告されている〔宇佐美 1979〕が、そのほとんどが略報告であり、正式な報告や具体的な遺跡研究等は少ないので現状である。

本遺跡群の調査・研究は、剣野山一帯を踏査した柏崎先史考古学研究会の活動が発端であり、分布図の作成は、現在明らかにできない遺跡を考えれば貴重な記録である。当時、剣野E遺跡から採集された土器類について、三井忠氏により写真をみせられた山内清男氏は、当土器群を中期初頭に位置付け「剣野E式土器」と名付けたと言い〔金子 1987〕、これら資料については別に報告されている〔金子 1967〕。この剣野E遺跡をはじめとした遺物、特に土器類についてはそれなりに検討されているが、資料が公表されたのは最近であり〔柏崎市史編さん委員会前掲〕、遺跡研究も含めた具体的な検討は、今後なされなければならない課題である。

剣野B遺跡確認調査 剣野山繩文遺跡群が所在する台地上は、その大半が市指定史跡であったこと也有って、B・C・Dの各遺跡はほぼ原状のまま保存されてきている。しかし、指定後十数年を経て、周辺の状況も大きく変化している。台地の下は、すでにその大半が宅地化し、

遺跡部分への具体的な開発計画も時間の問題といつても過言ではない状況である。しかも指定当時は、調査体制が不備なこともあるて遺跡の範囲や内容あるいは性格といったことから、指定に対しての処置等に至るまで不十分な部分が存在し、現代社会にとっては全くそぐわないものとなっていた。剣野B遺跡は、現在まではほとんど手の付けられたことのない保存状態良好な遺跡と目されていたが、市街地にはもっとも近い位置にあることから開発の懸念もあり、早急に遺跡の範囲とその性格を明らかにする必要に迫られていた。

昭和62年、市文化財調査審議会において、剣野B遺跡についての経緯や状況を報告し、今後の取扱い等について意見を求める、早急に確認調査を実施することとした。しかし、その面積がおよそ30,000m²と広大なため、調査には国・県の補助金を導入する必要があったが、すでに次年度分の事業計画が縮め切られていたことから、昭和63年度に事業計画を提出、昭和64年度調査の実施ということとなった。ただ、補助金導入に際し、対象面積が広大なことや事業費等の関係から、調査の規模や精度を落とさざるを得なかつたことは残念であった。

平成元年4月に、剣野B遺跡について国庫補助金の内示があり、事業実施の目途が立った。当初5~6月頃実施の計画であったが、その頃緊急調査の飛び込みがあり、また、調査の準備でも諸手続きが遅れた関係で、文化財保護法第98条の2の規定に基づく発掘調査の通知は、平成元年7月28日付け、教社第476号となった。秋10月には別の発掘調査が予定されていること也有つて、平成元年8月1日から調査を実施した。

調査の目的と方法 剣野B遺跡は、標高15~20m程の段丘上平坦部に広がり、その面積はおよそ30,000m²近いが、その中心は南西側のやや小高いところとされていた。しかし、他の地区における状況や、中心部における住居址の有無など具体なことは、遺跡の範囲を含め全く漠然としたものであった。今回の調査目的は、遺跡の範囲及び住居址等遺構の分布を明確にし、かつそれらの粗密を把握することにより今後の保存処置に向けての基礎資料を得ることにある。調査は、遺跡周辺部から中心部に向かって掘り進め、遺跡範囲外を明確にしていくことを前提とした。これは、調査費用が厳しい中で広大な面積を対象とした場合、すべてを満遍なく調査することや、検出された遺構等に対し充分な対応が不可能であるため、中心部での発掘を極力最低限に押さえ、遺跡中心部を保護するとともにできるだけ広範囲を調査するためであった。

2 確認調査の経過

確認調査の期間(現場作業)は、平成元年8月1日から同年9月5日までの延べ24日間であった。8月1日に現場事務所を設営し、器材を搬入、翌2日から発掘作業を開始した。発掘作業に当たったのは、柏崎市高齢者事業団シルバー人材センターの会員延べ138人である。

8月2日、農道より南西側の台地部調査に着手。グリッド設定のため杭打ちを行ふが、盛夏ということもあって下草や雑木が繁茂し、10mおきの杭を打つ度に藪の刈り払いをしなければならず、かなり難航した作業が終日続いた。3日、O-14・O-16トレントの発掘を開始する。なお、発掘区設定のビニールテープが、本日朝にライターで焼き切られているのが発見された

が、これ以後ほとんど毎日続くことになった。

N-18グリッド周辺には古墳の可能性も指摘された塚状の遺構があり、4日はこの確認作業を実施。古墳の場合に主体部の破壊を避けるため、裾部4ヶ所にトレンチを設定、発掘する。盛土部分は、黒色土を主体としていることが確認され、当該遺構については大小2基の塚群であると断定した。地山面から複数のピット等の落ち込みを検出したが、トレンチが狭いこともあって遺構発掘は断念した。7日、塚の土層断面の写真撮影及び実測を行う。また、O-20・P-20・M-20・J-19トレンチを発掘する。8日、M-18・P-20・M-20・J-19の各トレンチを発掘。J-19から遺構らしき落ち込みを検出したため、K-19トレンチを設定し拡張した。塚のトレンチは、本日埋め戻す。9日、K-19・J-19トレンチを発掘。後者については、落ち込みの発掘を実施。①グリッドからは焼土を確認、炉址の可能性が考えられた。

遺跡東半部、農道北部の調査は、9日から着手し、M-9・M-12トレンチを発掘。前者は礫1点の他遺構・遺物なし。M-12では、北半部において平安時代の土師器が比較的多く出土した。11日、M-12②からは鉄津とともに平安時代の土師器等を伴う炉址を検出、小鋳治等の可能性が考えられた。本日で調査の前半を終了、お盆休みとした。

8月17日、後半戦を開始。M-12・S R-1の調査を継続。また新たにL-14・I-14トレンチの発掘に着手し、遺跡西半部へと調査を進める。18日、M-12トレンチの図化作業等を終了。L-14は、表土がかなり深く、上層位から繩文土器や土師器が出土。I-14では、風倒木らしい落ち込み2か所を検出、縄文中期初頭の土器を伴っていた。19日、L-14は、調査3日目でもまだ地山の検出に至らない。I-14は完掘、F-14・D-13トレンチの発掘に着手。21日、L-14は4日目、地山の検出作業がかなり進み、住居らしい柱穴群を確認。D-13・B-14トレンチを発掘し、I-14トレンチの図化作業を実施。22日、D-13・B-14トレンチ発掘の継続、L-14は住居址ピットを発掘。23日、7か所のトレンチを埋め戻し、B-14・C-11トレンチを発掘。調査は、まず西半部の北部側から進めることとした。24日、C-11トレンチの発掘を継続するとともにB-14⑤のSK-1及びD-13②SK-1の発掘を行い、更にD-13①・C-12⑤のマス掘りを行う。25日にはB-10⑤の発掘に着手した。調査はこれより北側へも進める計画であったが、全く見通せないひどい藪であり、しかも調査費が乏しくなったことから、遺跡西半部の北部に対する調査のこれ以上の継続は断念し、南半部の調査へ早急に移行することとし、8月25日から着手した。

南部は、遺跡の中心と目されていることからマス掘りに切り換え、グリッドの交点を基本に発掘区を設定したが、当該地区中央の畑には作物が作付けされており、また調査費用が残り少ないことから土器捨て場の存在確認等南側の調査も対象から除外し、状況の全く不明な北部に全力を注ぐこととした。調査の具体的な内容は後述するが、日別に略述すると25日は2か所、26日には4か所、28日は5か所、29日は6か所、30日は1か所、31日に1か所とマス掘りに着手し、順次完掘。これらは、写真や図化作業を終了次第埋め戻しを行い、31日にはすべてを完了。器材の搬出や水準点の標高移動等は9月5日まで行い、確認調査現場作業を一応終了した。

II 環 境

1 地理的環境

柏崎平野概観 新潟県中央西部に位置する柏崎（刈羽）平野は、鶴川と鯖石川及びその支流別山川等を主要河川として形成された臨海沖積平野である。平野部は、刈羽三山と称される米山・黒姫山・八石山を頂点とする山地や丘陵（東頸城丘陵）によって囲まれ、北西部を日本海に開口する。沿岸部は荒浜砂丘が形成され、その後背地をなす沖積地は湿地性の低地となっている。また丘陵縁辺は、中・高位段丘が分布している。柏崎平野は、北流する2大河川、鶴川と鯖石川によって西部・中部・東部に大きく区分され、各々特徴的な地形をみることができる。東部は、向斜軸に沿った丘陵地帯で信濃川流域と境し、中部は黒姫山を頂点とした中位段丘が広がり、西部は米山山塊を主体とした山地となっている。

鶴川下流域の地形 鶴川下流域は、東岸域と西岸域とでは対象的な環境にある。東岸は、中位段丘が侵食され島状に冲積地内に浮かぶ地区もあるが、大半は「鏡ヶ沖」という湖沼があったとされる伝承があるように、標高が2~4mと低く、湿地性の強い水田地帯となっている。また鶴川沿いには、自然堤防が形成されるが、丘陵や台地の縁辺とともに集落立地の適地を提供している。西岸は、米山山塊とは前川など幾つかの小河川によって分断されるが、奥の深い丘陵が広がる。近世以来の集落は、河口付近を除けば剣野集落程度でしかないが、縄文時代の遺跡分布は多く、これらのほとんどが市指定史跡「剣野山縄文遺跡群」として指定されている。



第1図 柏崎平野と縄文時代主要道路 (1:100,000) 國土地理院 1:50,000柏崎を使用

2 歴史的環境

剣野山縄文遺跡群の概略 本遺跡群は、現在A～Fの6地点で把握される。剣野A遺跡(10)は、ほとんど現存しないが地形的にみてもかなりの規模を持っていたと考えられる。本遺跡の主体的時期は縄文中期にあるが、舟底形の細石刃核が1点出土していることから、旧石器時代末には人々が生活していた可能性がある〔伊藤・品田 1988〕。その後創草期から早期の空白期をおいて、前期初頭及び後半から後期初頭まではほぼ連続的に遺跡が残され、弥生後期後半の遺物を少量残した後に終焉を迎えている〔品田・鈴木 1987〕。この弥生土器は斐頭部破片で、櫛描波状文を2帯施文しており、本市域では唯一の信州系箱清水式土器である。剣野B遺跡(1)は、縄文中期前葉を主体とし、晚期中葉の資料も比較的まとまっている遺跡として知られ、この他に前期末・中期後半・後期後半・晚期の遺物が少量採集されていた〔宇佐美・寺崎 1987a〕。後述する剣野E遺跡とおおむね並行する段階から本遺跡の主体的時期が形成されており、両遺跡の緊密な関係が想定される。また今回の調査からすれば、平安時代の鍛冶址や塚の再確認といった成果以外では、時期的には大きな変動はないが、縄文聚落としてはかなり良好な遺跡であることが判明している。なお、採集品の中には、北陸の串田新式土器が含まれ、米山山塊以東では数少ない事例である。剣野C遺跡(2)は、遺跡の状態は不明な点が多いが、縄文晚期中葉新段階(大洞C2式新)の一時期に短期間営まれていた遺跡である〔品田 1987b〕。本遺跡と並行しそうな遺跡は、柏崎市域では今のところ確認されていない。剣野D遺跡(3)は、市指定史跡の要とも言える遺跡である。時期的には、縄文後期初頭から中葉を主体とし、後期後葉の土器群も若干採集されている。遺物の中には呪術的な石棒等があったり、勾玉等の玉類も多く、拠点的な聚落の可能性が強い〔岡本 1987〕。剣野E遺跡(5)は、中期初頭を主体とする〔金子 1967・金子 1987〕が、遺跡の大半が消滅していることから実態は不明な点が多い。ただ、立地面からも遺跡の規模はそれほど大きくなかったと考えられ、中核的様相を具える剣野B遺跡との関連が指摘できる。剣野F遺跡(4)は、縄文後期と考えられる土器類・石器類が出土しているが、量的には少量であり、主体は古代・中世である〔宇佐美・寺崎 1987b〕。中世は、珠洲焼の壺・擂鉢が完形で出土しており、墳墓に伴う骨蔵器の可能性がある。

本遺跡群は、発掘調査による各遺跡の把握がほとんどないため具体的には不明な点が多いが、旧石器時代末頃から程度かの断絶を経ながらも連綿と続いた遺跡と言えよう。また、剣野A遺跡や今回の剣野B遺跡のように部分的でも調査された遺跡からは、比較的大形の石錘が多く出土していることが特に挙げられる点である。おそらくは、鵜川における漁獲がかなり盛んに行われていたことを示唆するものと考えられ、剣野山一帯に本遺跡群が立地する事由の一側面を示している。

周辺の遺跡と剣野山縄文遺跡群 柏崎平野における主な縄文遺跡は、3～4km間隔に1遺跡程度が分布する。剣野周辺では、西へ丘陵を越えた前川流域の左岸に川内遺跡が所在し、南では堀・南下台地遺跡群〔柏崎市教委 1990〕、東では田尻地区に十三仏塚遺跡〔品田 1987c〕が所

在している。北側は河川の氾濫原でもあった沖積地を挟み、対岸の西中通地区に岩野遺跡が立地している。時期的には、中期を中心とした前期前半から後期の遺跡であり、晩期については概して少ない。剣野遺跡群内では、剣野沢遺跡(13)から晩期と考えられる土器群が比較的まとまって出土している〔柏崎市教委 1988〕。绳文時代の遺跡としてはこの他に赤沢遺跡(1)・洪柿遺跡(9)等があるが、時期等詳細は不明である。

弥生時代は古墳時代とともに、全時期を通じて鶴川流域に立地する遺跡が少なく、分布の中心は鮒石川の支流別山川流域にある。弥生後期後半の剣野A遺跡は数少ない事例であり、鶴川流域では他に鶴巻田遺跡〔藤巻 1987・新潟県教委 1988〕を掲げ得るのみである。古墳時代は、前期に属する柏崎農業高等学校校庭遺跡(8)〔岡本・坂井 1987〕が数少ない例である。当該期については、今後期待されるところといえよう。

奈良・平安時代については、柏崎平野全体に奈良期の遺跡がほとんどなく、律令体制下の状況はまったく不明である。遺跡数が多いのは、9世紀後半から10世紀代の平安時代であり、剣野F遺跡のはか剣野沢遺跡・三島神社遺跡(6)・洪柿遺跡・下沖遺跡(17)等が相当するものと考えられる。11世紀代の遺跡は、前述した柏崎農業高等学校校庭遺跡から若干の遺物が採集されており、本市域では当該期の遺跡が少ないと見られる。また、集落跡以外の手工業関係遺跡では、剣野B遺跡の鍛冶跡と関連する製鉄遺跡として剣野水上遺跡(14)が掲げられ、また剣野沢遺跡も鍛冶遺跡と考えられることから、剣野B遺跡の鍛冶工人との関連が興味深いところである。

中世の鶴川流域は、古代の三鳴郡三鳴郷をほぼ踏襲した鶴川荘の荘城であった。前期の遺跡が概して少なく、本遺跡群の南側に位置する西田・鶴巻田遺跡群を掲げ得るのみである。南北朝期以後遺跡数は比較的多くなる。琵琶嶋城跡(7)は、越後守護上杉氏の被官であった宇佐美氏の居城である。宇佐美氏の越後入りは南北朝の初め頃とされ、遅くとも14世紀半ばには琵琶嶋城に住したものと考えられる。鶴川下流域を占める宇佐美氏支配地は、14世紀後半における丹波安国寺と安田毛利氏とが所領を争った鶴川荘安田条上方が、最終的には後者に安堵されたことにみられるように、上方地内は安田毛利氏の支配地であり、宇佐美氏の支配は当該地までは及んでいなかったと考えられる。下方地内に所在する鳩屋敷遺跡(18)は、室町時代とされている。この地が宇佐美氏、安田毛利氏どちらの領域であったかは不明であるが、ここを越えるとすぐに琵琶嶋城であることから、下方と上方がその境であったと考えられ、伝承にもそのようなことが言われている。

剣野F遺跡からは完形の珠洲鏡2個体が出土しているが、前述したように墳墓の存在が考えられる。鶴川中流域では、新道の風牧山と堀・南下台地が中世での聖的な「場」である可能性が指摘されているが〔中野 1988・品田 1990〕、それらとはやや趣きは異なるものの類似した「場」が設定されていた可能性が考えられるであろう。時期的には14~15世紀であり、南北朝から室町期にかけての状況であったと考えられる。



第2図 刃野山古墳群と周辺の道路 (1:15,000) 柏崎市街図1:10,000を使用

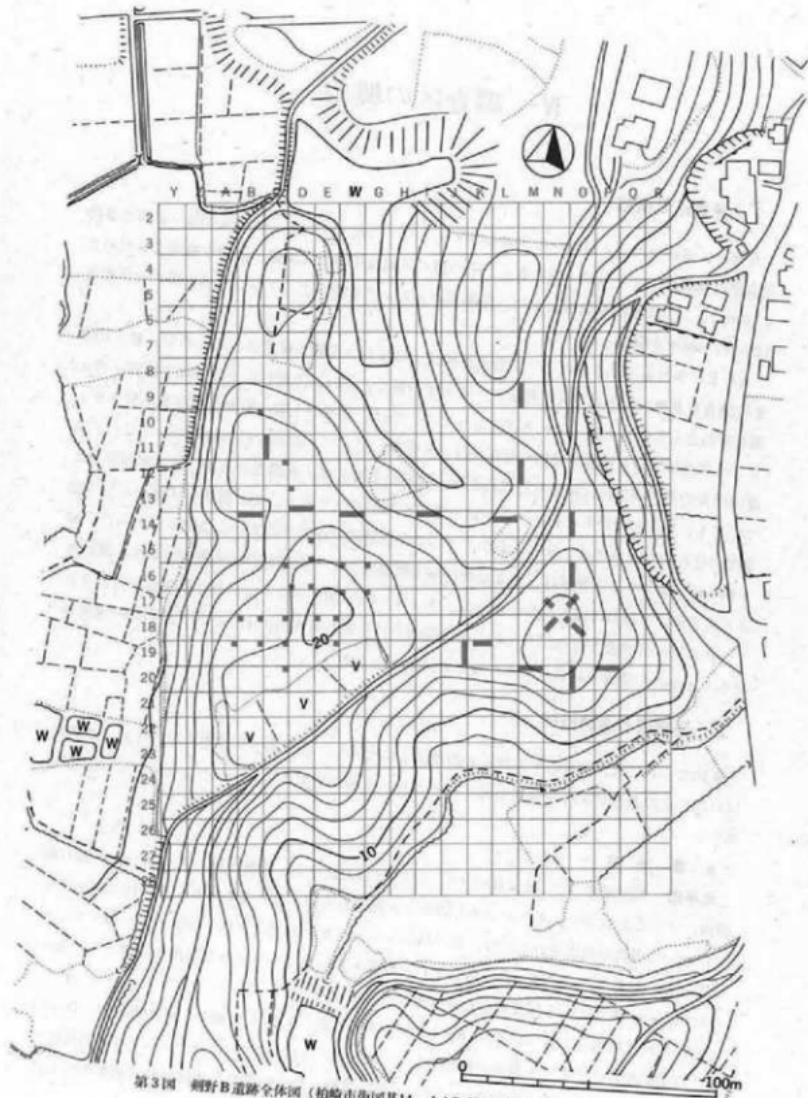
III 剣野B遺跡概観

立地と現状 剑野B遺跡が立地する段丘は、東側を鵜川に面した中位段丘と考えられ、上面はほぼ平坦である。標高は18m前後から20m程と15m前後の2段程度が認められる。西側は剣野の沢があり、北へ伸びた細長い台地であるが、小さな沢により各所を開析され、所々に独立的な様相をみることができる。剣野B遺跡一帯を細かくみると、剣野A遺跡から続く細尾根状の北部と、南東側に独立的な東部、そして遺跡の中心と目されていたやはり独立丘的な西部とに区分される。本遺跡の現状は、発見の端緒が終戦後の開墾にあったように平坦部の多くは畠であった。しかし、現在では一部に畠を認めるものの大半は山林で、しかも畠を荒したままの雜木林が半分近くにも及び、また手入れの行き届いた杉林は極く限られた部分しかなかった。

調査区の設定 本遺跡の範囲については、具体的には全く不明であったため、遺跡本体と考えられる地区及びそれに隣接する一帯を調査の対象とし、全体に 10×10 mのグリッドを設定した。その面積は、およそ27,000m²にも及ぶ。グリッドの名称は、東西を西からA・B・C…のアルファベットを、南北を北から1・2・3…の算用数字で標記することとし、北西隅を基準に西から①・②・③…、北から①・⑥・⑪…となるよう 2×2 mの小グリッドを設定した。また、グリッド設定区域は、前述したように敵地形的には3地区に区分できるが、本書ではひとまず東地区・西地区の2地区に便宜的に大別し、記述することとする。

遺跡の範囲 本遺跡の中心である縄文集落は、西地区にあり、本地区が遺構・遺物の濃密な区域であり、市指定史跡としてはなくてはならない地区といえよう。東地区は、縄文土器等の遺物が希薄ではあるが出土し、縄文集落の周辺を担う地区である。J-19グリッドからは炉址かと考えられる焼土遺構が検出されており、遺跡主体部の伸びと考えられる。また、大小2基の塚も構築され、基底部には幾つかの落ち込み等が検出されている。北地区は、尾根上から遺物・遺構の検出がほとんどなく、剣野A遺跡との緩衝地帯をなすが、中央の沢内から波状門司代の住居址や平安時代の鍛冶遺構と考えられるものなどが確認されており、遺跡中心部以上に遺跡が広がっていることを示唆している。したがって、剣野B遺跡の範囲は西地区と東地区であり、周囲の沢内等斜面部も含まれた範囲を想定できる。

層序 塚盛土は第O層とし、第I層：表土、第II層：遺物包含層、第III層：沢内堆積層、第IV層：地山漸移層、第V層以下：地山層とした。第III層は、L-14グリッドで検出された黒色層で、遺物の出土は確認できず、縄文中期より以前の堆積層である。第II層は、台地平坦部では薄く細分は難しいが、L-14グリッドではa～cの3層に別れている。a層は暗褐色を呈した平安時代の層、b層は明褐色を呈した縄文時代の層である。c層は、住居址覆土と一体となった褐色土層である。



第3図 斜野B道路全体図 (柏崎市街図其14 1:2,500 昭和47年を使用)

IV 調査区の概要

1 発掘区と概観

発掘は、遺跡主体部と目される区域を 2×2 mのマス掘りとして、できる限り遺構や遺物包含層を保護することを第一義に考え、その他の区域は集中的に遺構・遺物を確認するため 2×10 mのトレンチ発掘を原則とした。塚確認のトレンチを除くと、トレンチ15か所、マス掘り22か所、 388m^2 を発掘した。

A-E-3~8グリッドは、「剣野遺跡地図」によれば遺物が採集されているが、B-10⑤まで調査を進めたがそれ以北は物凄いススキ等の藪で、これ以上進むことは時間の浪費と考え、調査を断念した。K-M-3~8グリッドについては、北端の土取り断面の観察及びM-9トレンチ発掘結果から遺構・遺物の存在がほとんど無いとして、調査を打ち切った。ただし、遺跡内中央の東西両地区に挟まれた沢斜面は、時間的余裕が無く未調査である。また沢頭部分についても、M-12及びL-14トレンチから遺構が検出されており、また周囲の状況からして遺構等の存在する可能性は十分存するが、すべてを網羅的に確認するまでには至らなかった。M-P-16~20グリッド周辺は、塚2基及び塚下層遺構とJ-19⑤の炉址状遺構の他は、遺構はほとんど無く、遺物は概して少なかった。A-I-20~26グリッドは、畑に作物が作付けされていたことから調査できなかつたが、南側斜面から多量に遺物が出土することが周知の事実であることから、遺跡主体部に含まれることは明らかであった。

2 発掘区と遺構概観

本節については、調査区を東地区と西地区とに大別し、各発掘区を概観する。なお、各発掘区については紙数の関係で概要を記すのみとし、遺構の検出されているところを中心に記述する。

a 西 地 区

北半部 本区域は、ひとまずHのグリッドライン以西とする。発掘区は、A-G-10~20の範囲内にすべてが取まり、4トレンチと22のマス掘りを実施した。北半のB-F-10~14グリッドにおいて遺構が検出されたのは、B-14トレンチ (B-14⑤)・D-13①・D-13トレンチ (②~⑤)である。遺物は、B-10⑤・C-12⑤・F-14トレンチからの出土はほとんど無かったが、その他ではある程度の出土量は確保されていた。

検出された遺構は、B-14⑤、SK-1土坑・D-13①、SK-1土壙の2基が明確で、D-13①では遺物を伴う小ピット数基が検出されている。D-13トレンチ (②~⑤)では、明褐色土を覆土とする6基とピットを検出し完掘したが、遺物がなく時期及び性格等の詳細を明らかに

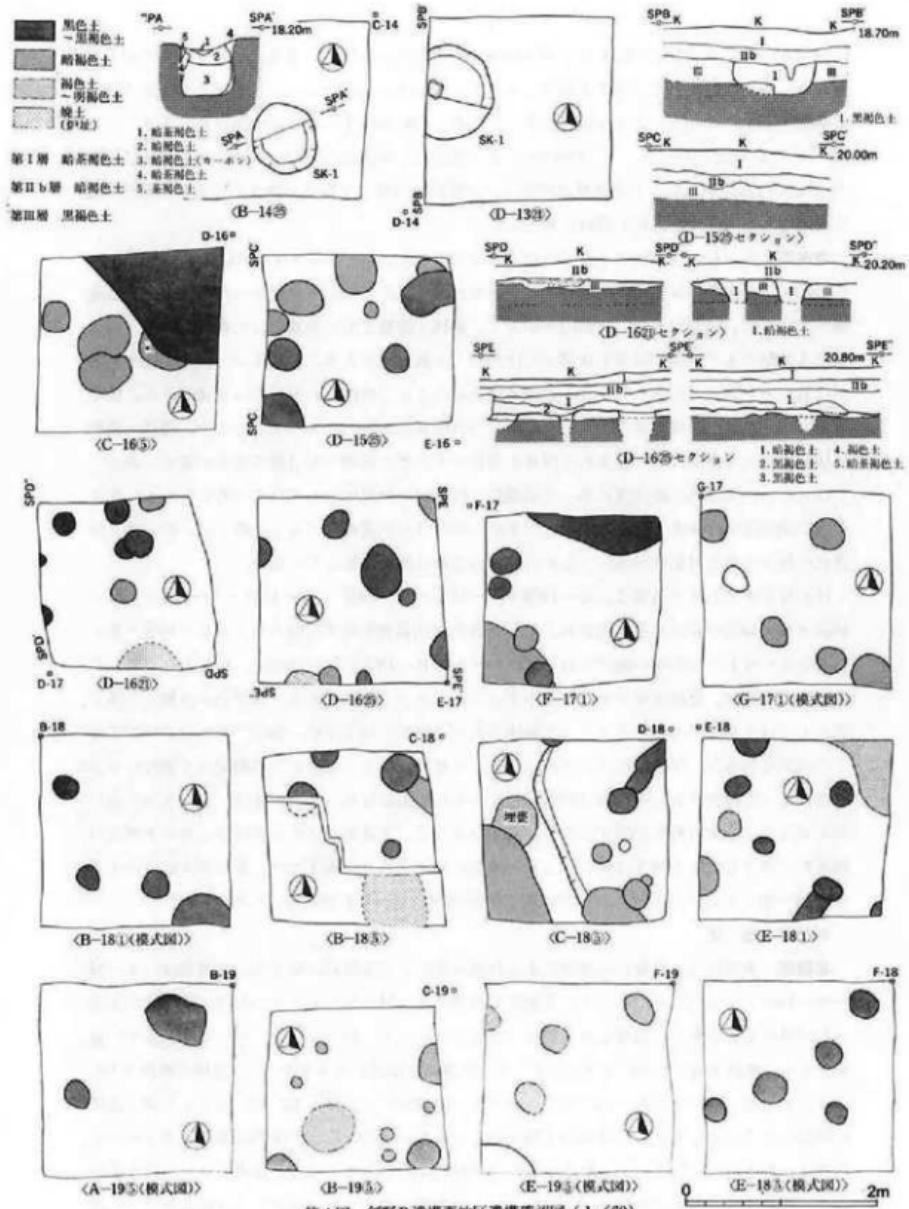
できなかった。B-14. SK-1は、74×68cmの円形プランを呈し、深度は55cmを計る小堅穴坑である。覆土は暗褐色土が大半を占め、カーボン粒が多く含んでいた。遺物は土器類を主体に比較的多く出土したが、大半は破片であった。D-13. SK-1は、一部発掘区外にあるが、平面プランはほぼ円形を呈し、直径96cmを計る。深度は、確認面から12cmであるが、本来は30cm程となる可能性がある。本遺構確認段階に、上層位から扁平な板石が出土しており、墓標をなす可能性があり、一応本址を墓坑と考えたい。

南半部 A-G-15~20グリッドに相当する南半では、D-15⑤・F-16①・G-16①・C-19⑤・C-20⑤の5発掘区で遺構と遺物両者ともほとんど検出されなかつたが、その他は遺構が検出され、遺物出土量も比較的多かつた。遺構・遺物ともに希薄だった発掘区内、前3者は本遺跡でもその居住区等主体部からは外れた区域を示すと考えられるが、後2者はそれらとは異なる在り方と考えられる。遺構・遺物がほとんど検出されない点は共通するが、後2者が台地平坦部の中央にあること、表土下の包含層後が硬くしまっていたこと、遺構・遺物の検出された発掘区に取り囲まれる様相を看取でき、更に南側へも遺跡の延長が確実であることなどから、集落居住域内部にあって遺構群に囲まれた空間を示していると考えられる。なお、今回の調査は確認調査であり、西地区南半から検出された遺構群（ビット群）は、数も多く住居址の柱穴である可能性が高いことから遺構の発掘自体は実施していない。

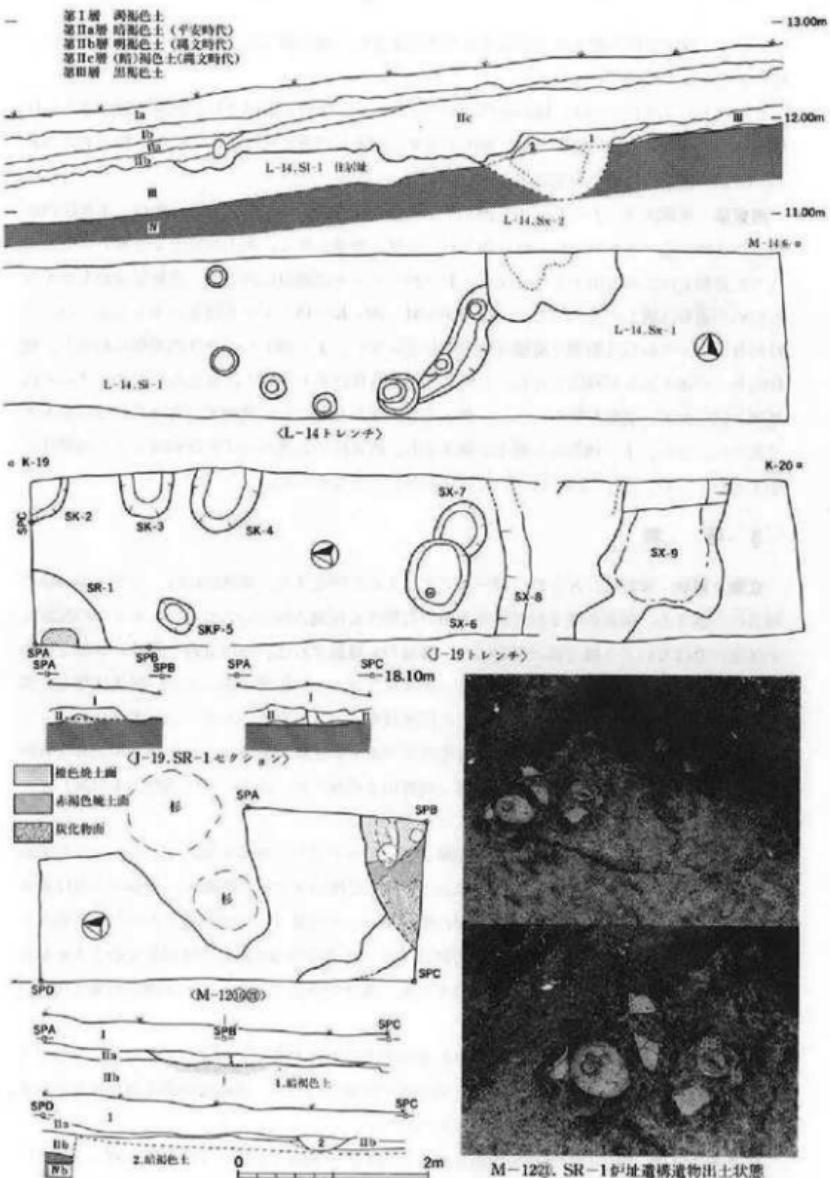
住居址と考えられる遺構は、B-18⑤・C-16⑤・C-18⑤・D-15②・D-16②・D-16③・E-18①の各区から検出され、また住居址の可農政を有する物としてはE-18⑤・E-19⑤あるいはF-17①等が掲げられる。このうち、B-18⑤とD-16②は、炉址を伴っている。住居址の規模は、発掘区が2×2mと小さいこともあって不明である。掘り込みは概して浅く、壁もしくはそれと考えられるプランが検出されたのはC-18⑤とC-16⑤、それにF-17①もその可能性が強い。住居址については、プランの確認に留まっているため断定はできないが、調査によって検出されたその数は10基前後からそれ以上となる。平面形態は、隅の丸みが強い例もあるが、隅丸方形状を呈するのが一般的なようだ。2基検出された炉址は、共に平地式の地床炉であり石による囲みは無い。これら遺構が検出された発掘区では、量の多少にかかわらず遺物が出土したが、それらの大半は繩文中期初頭期に属する物で占められていた。

b 東 地 区

北西部 東地区は、北東から南西に走る林道を境にして2区に区分する。北西部は、I～M-9～14グリッド内に4トレンチの発掘区が分布する。M-9トレンチからは、礫1点が出土した以外は遺物も無く、遺構も全く検出できなかつた。I-14トレンチについては、若干の遺物とともに風倒木痕は2基検出されたが、人為的遺構は明確にできなかつた。遺構が検出されたのは、M-12トレンチとL-14トレンチである。前者からは、M-12. SR-1とした焼土遺構が検出されている。本址には鉄滓の小塊が伴っており、鍛冶に伴う炉址的な遺構と考えられる。時期は、炉上面から出土した土器器坏から平安時代中期の所産である。調査できたのは全体の1/3程度であり大半は発掘外にある。プランは円形と考えられ、直径も1m前後を計る。掘



第4図 利野B構造西地区地質確認図 (1/60)



第5図 須野B遺跡東地区遺構図 (1/60)

り込みは、検出層位が縄文時代の包含層である黒褐色土層上面であったことから確認できず、柱穴等の存在も不明である。

L-14トレンチ内からは、概ね円形に配列する小ピット群が検出され、断面の層序等から住居址と考えられる。床は軟らかくて検出できず、炉址も調査区外に存在している物と考えられる。時期は縄文時代中期前葉に属する。

南東部 発掘区は、J-P-16~20グリッド内とO-14トレンチである。塚は、本地区内にあるが次節で述べる。O-14・O-16トレンチは、遺構も無く、表土がほとんど無いこともあってか遺物もほとんど出土していない。P-20トレンチは斜面にあって、遺物包含層も厚かつたためか遺物は概して多かったが、O-20・M-20・K-19トレンチは余り多くなかった。これら各トレンチからは明確な遺構は検出されていない。J-19トレンチは南斜面に相当し、比較的多くの落ち込みが検出された。しかし、遺物自体は余り多いとは言えないため、すべてに発掘を試みたが、遺物が無かったり、伴っても断面から明らかに風倒木と考えられる穴が大半であった。ただ、J-19⑤から焼土が検出され、西地区的状況からすれば炉址である可能性が存するが、これに伴なう柱穴については明らかにできなかった。

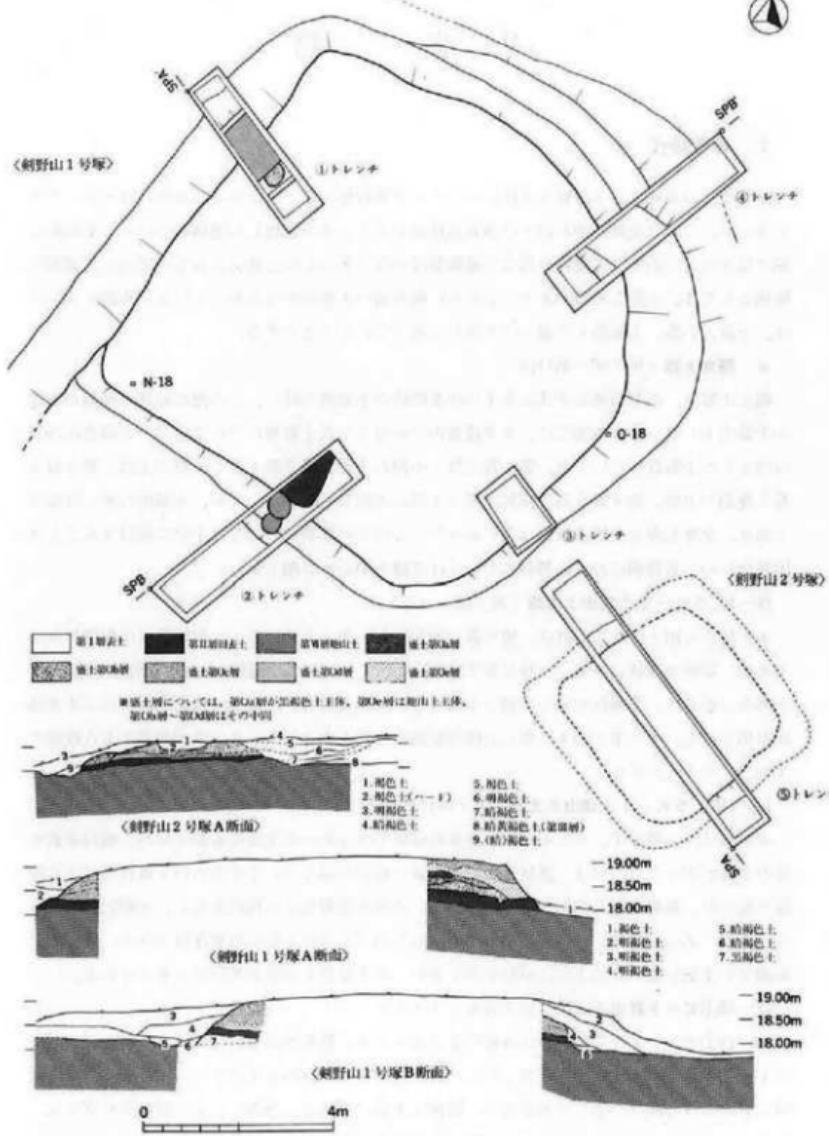
3 塚 群

立地と現状 塚群は、N-O-17~18グリッド内に所在する。場所的には、やや小高い丘の頂点に位置する。墳頂部は平坦であり古墳の可能性も指摘されていたため、トレンチの配置も主体部に及ばないよう縁辺部に限定した。微地形を観察すれば、ほぼ北西一南東に軸線を持つ前方後方墳的なプランであった。現状は、雜木を主体とした山林であったが、戦後開墾した畑が荒れたものである。塚群の形状も、この開墾段階にかなり変更されたことが考えられる。トレンチ調査の結果、封土としての盛土は黒色系の表土が主体であり、これらが塚であると判断され、前方部状の突き出しも小規模な塚（剣野山2号塚）が、大きい塚（剣野山1号塚）との間を埋められてつながったものであることが判明した。

平面形態 本塚群は、上部の盛土が開墾によって削平され、周囲を埋めていることから平面形態は余り明確でない。ただ、塚本体に比し、新たに埋め戻された周溝は、土砂の一部は若干沈んでいることがうかがえ、これを目安に観察する。1号塚は、平面形態をおおむね方形として主軸をN-54°-Wへ指向させ、長辺約11.5m×短辺約10.5m、高さは現状で約1.1mを計る。2号塚も平面形を方形とし、1辺約4.5m、高さ40cm余りであった。主軸は明確でないが北西一南西を指向している。

断面形態 上部は開墾によって削平され不明であるが、本来は平坦部の少ない頂部を有していた物と考えられる。基底部は旧表土と地山層で形成されるが、明確な周溝は掘られておらず、盛土は褐色土と暗褐色土の互層で占められていた。

基底面の遺構 幾つかの遺構が検出されているが、未発掘であることと遺物が伴っていないことから詳細は不明である。この中に炭化物を充満したピットが検出されており注目される。



第6図 剣野山1号塚・2号塚

V 遺 物

I 縄文時代

縄文時代の遺物は、土器類を主体にコンテナ3箱程度が出土している。量的にはそれほど多くないが、これは遺跡の中心部での調査面積が小さく、また検出した遺構についても原則的に開けなかったためで、本遺跡全体での遺物量はかなり多いものと考えられる。出土した遺物の種別としては、土器と石器があり、これらに極少量の土製品がともなっていた。本節においては、土器、石器、土製品その他とに大別して述べていくこととする。

a 縄文土器（第7図～第11図）

縄文土器は、中期前葉を主体に若干の中葉段階の土器群が伴い、この他に後期や晩期の土器が少量出土している。本項では、まず遺構内から出土した土器類について述べ、各調査区内から出土した土器群については、第1群土器：中期の土器、第2群土器：後期の土器、第3群土器：晩期の土器、第4群土器：粗製土器の4群に大別して述べる。なお、土器類の多くは破片であり、全体を復元できる資料は乏しかった。このため器形については十分に検討することは困難なため、各群別における細別においては文様を中心に分類したい。

B-14. SK-1 土坑出土土器（第7図1～5）

本土坑から出土した土器群は、破片数で20片ほどが出土しているが、個体数では数個体程度である。器種は深鉢のみで、文様を施す精製土器（1～4）と、綾縞文を有する粗製土器（5）等がある。前者は、黒褐色を呈し、細い半截竹管による文様と、隆線や口縁部に撚糸による文様が多用される。また第7図8に似た口縁部装飾の小片も出土しており、中期前葉でも古段階の土器とることができよう。

D-13①. SK-1 土壙出土土器（第7図10～11）

本土壙は、全掘せず、また木の根に挟まれ採集できなかった土器片もあったが、概ね2個体分の土器が出土した。11は、波状を呈する深鉢口縁部の破片で、やや太めの半截竹管による隆線が曳かれ、軌軸文と交互刺突文が施される。色調は黒褐色から褐色を呈し、比較的丁寧な造りの土器である。10は、口縁部に1単位の突起を有するやや小形の粗製深鉢である。体部は無節縞文が全面を覆い、胎土には砂粒を多く含む。本土器群も中期前葉段階と考えられる。

D-13②. ビット群出土土器（第7図6～7・9）

D-13②グリッドからは直径10cm程の小さなビットが数基検出されたが、それらのビットには1～2個体ほどの土器片が包含されていた。同一ビット内出土ではないが、時期的にはほぼ同じであり、今回は一括して報告する。器種は小形の深鉢で、色調はともに褐色系を呈する。6は、口唇部と文様の基本線でもある隆線上に撚糸文を施し、文様間には細い竹管による平行

文が充填されている。7も、基本的には細い竹管によって文様が施文され、口縁部付近には斜格子目文が施される。9の深鉢底部は、半截竹管により連弧状に施文し、その区画内には縦位に平行竹管文が施されている。

第1群土器（第7図1～第9図124）

本土器群は、中期前葉を主体に若干中葉まで下がる土器が含まれている。器種としては、深鉢で占められ、浅鉢はない。深鉢の器形は所謂バケツ形器形が多く、キャリバー器形は少ない。色調は、橙色から黄褐色が多いが、古手と考えられるものは黒褐色から褐色を呈する傾向がうかがわれる。胎土中には、1～2mm程の砂粒が含まれる場合もあるが、大半は良く精選され混入物は少ない。焼成は概して良い。以下、文様を中心に分類し、概観する。

第1類：比較的細い竹管により文様が施文される土器群（1～4・6～9・12～13・15～18）

前述した遺構出土土器群の多くはこれに含まれる。半截竹管の幅は3～5mmを計り、文様の要素としては、撚糸文や斜格子目文が伴う。半截竹管文の間隔は、区画内の充填では密であるが、その他では広い。半截竹管文の施文具合等により、一応2類に分類する。

- a 細い半截竹管を曳くことにより一条の隆線状の表現とし撚糸文を伴うことが多いもの（1～4・6～8・12・17）

- b 若干広い半截竹管を用い2条の沈線が表現されるもの（9・13・15～16）

第2類：半截竹管による半隆線に爪形文が施文される土器群（19～53）

半截竹管により口縁部や頸部に数条の平行文を施文し、その中の1ないし2条に爪形文を施す。半截竹管の幅は7～10mmと広くなる。爪形文の施文方法や間隔から概ね4類に細分できる。

- a 爪形文の間隔が比較的離れ粗いもの（21～22）

- b 爪形文の間隔が比較的密なもの（23～42）

- c 爪形文の間隔が密なもの（43～53）

- d 半隆線を半截竹管により縦位に連続して区切り爪形文状の文様を施すもの（19～20）

a類は半截竹管による平行文があまり多条化せず、頸部の無文帶も比較的広いが、b類では半隆線が高くなり多条化する。口唇部に爪形文が施される例は少なく、c類に1例(44)認められるのみである。c類とした土器群の中には、連続刺突文が施された土器があり、新崎II式土器のメルクマールとされていることから時期的には下るものといえよう。d類については明確でないが、爪形文の文様を意識した在地的なものかも知れない。

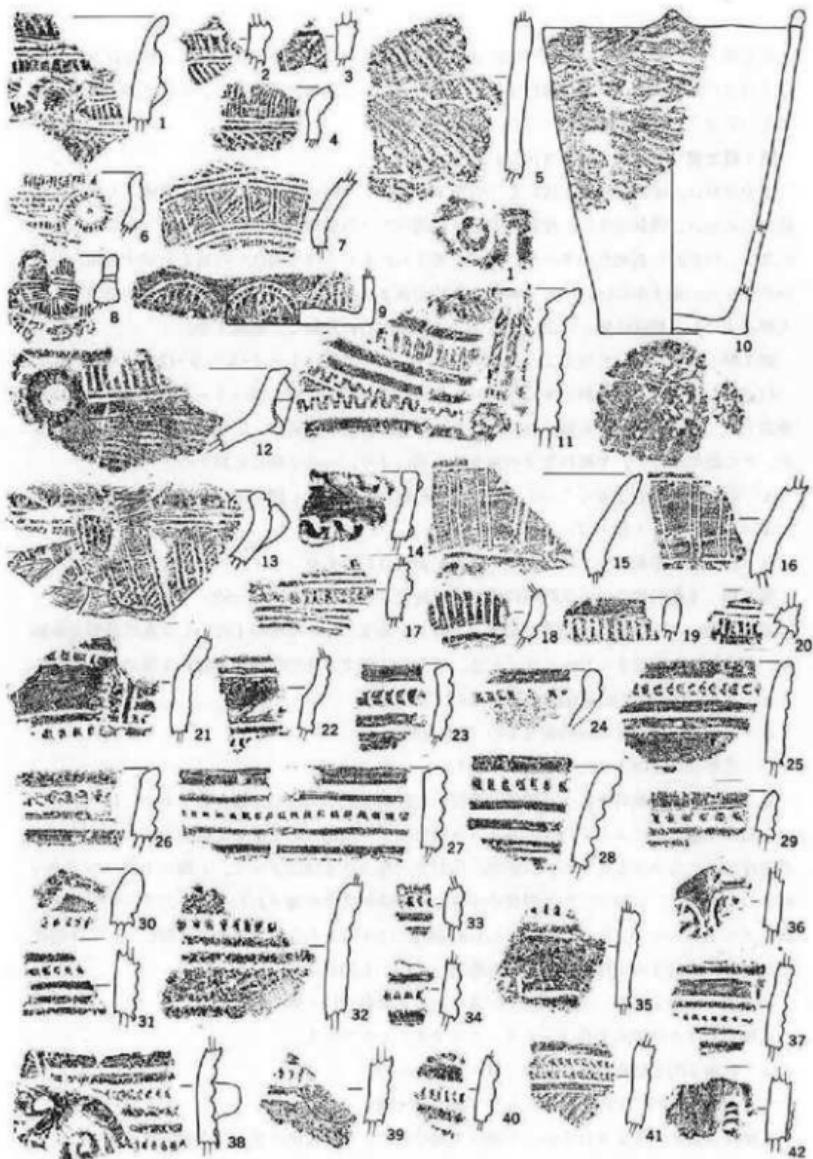
第3類：軌軸文あるいは蓮華状文が施文される土器群（11・54～64）

本類における特徴的文様は、大きく2分することができる。

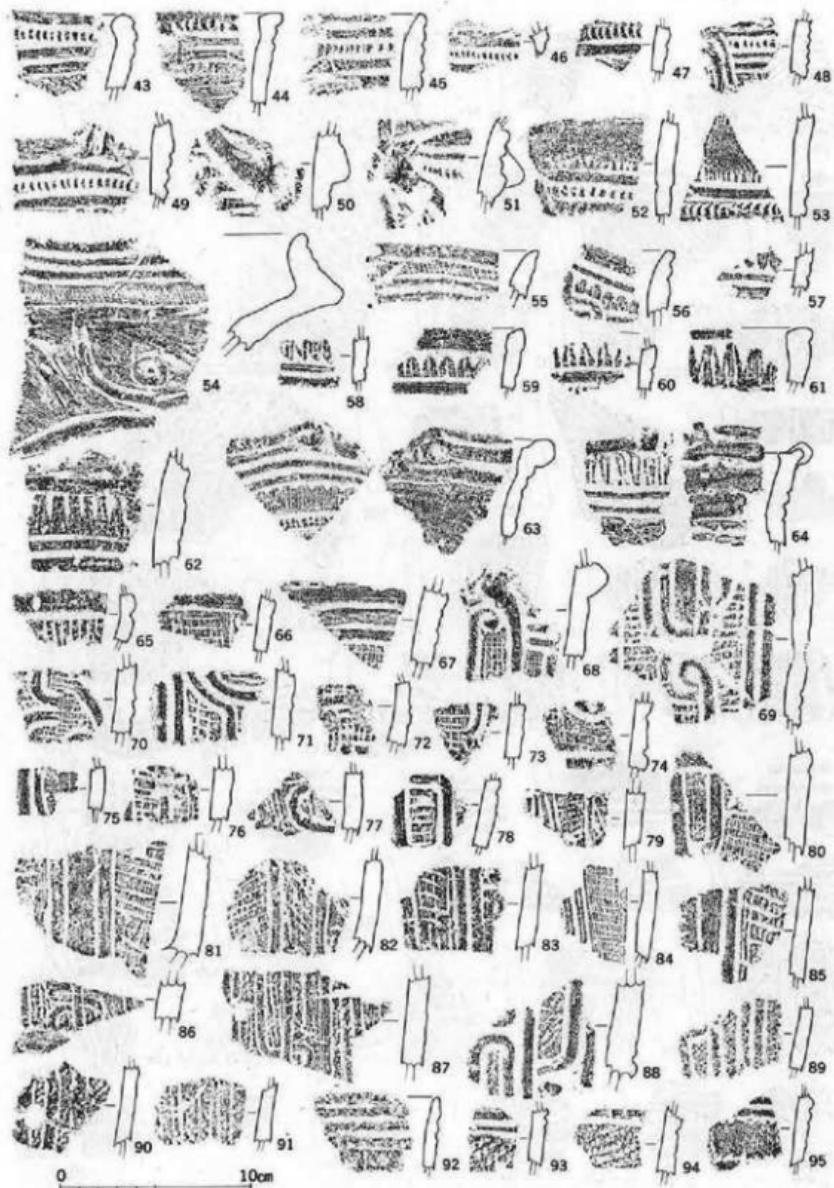
- a 軌軸文的な様相の強いもの（11・54～55・63）

- b 蓮華文状的に変化しているもの（56～62・64）

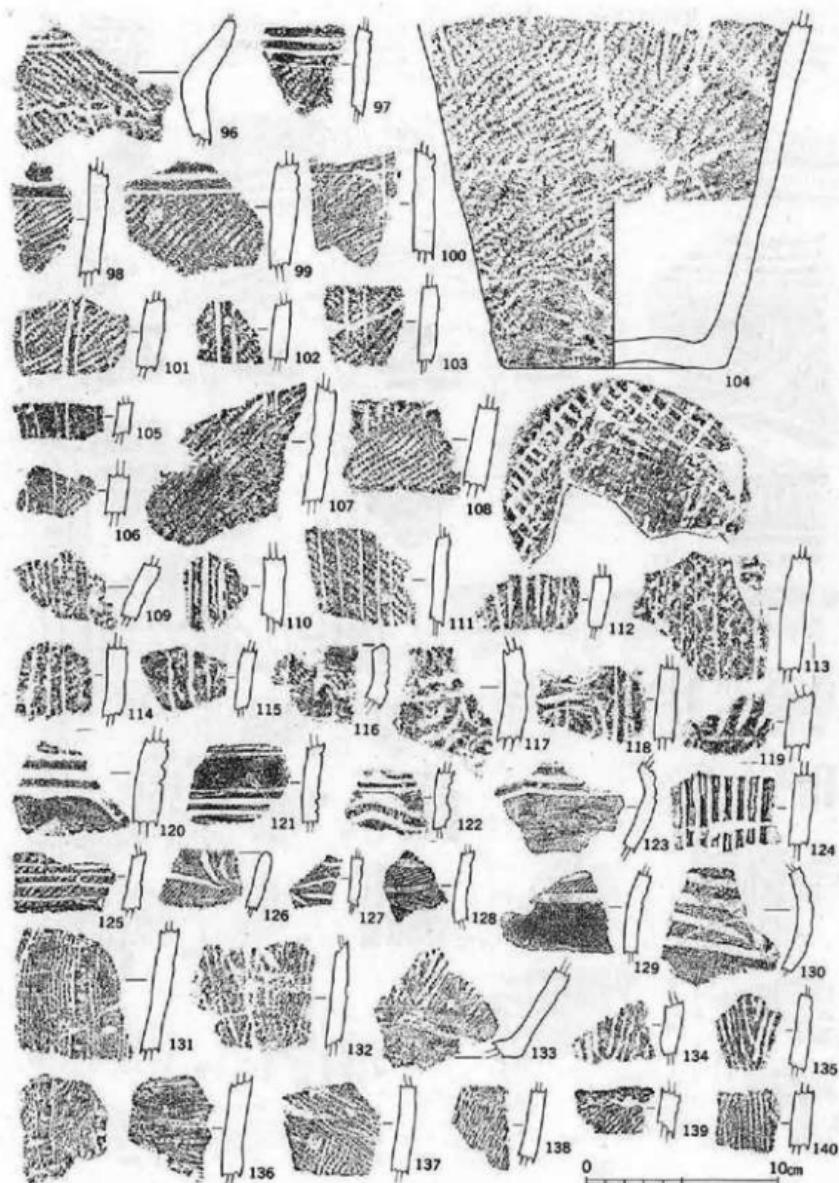
a類は細線状に施文されるが、b類は半截竹管により大雜把に描かれる傾向をうかがうことができる。またb類の蓮華状文の表現は、三角形に印刻するものが多いが、やはり簡略化されたものである。



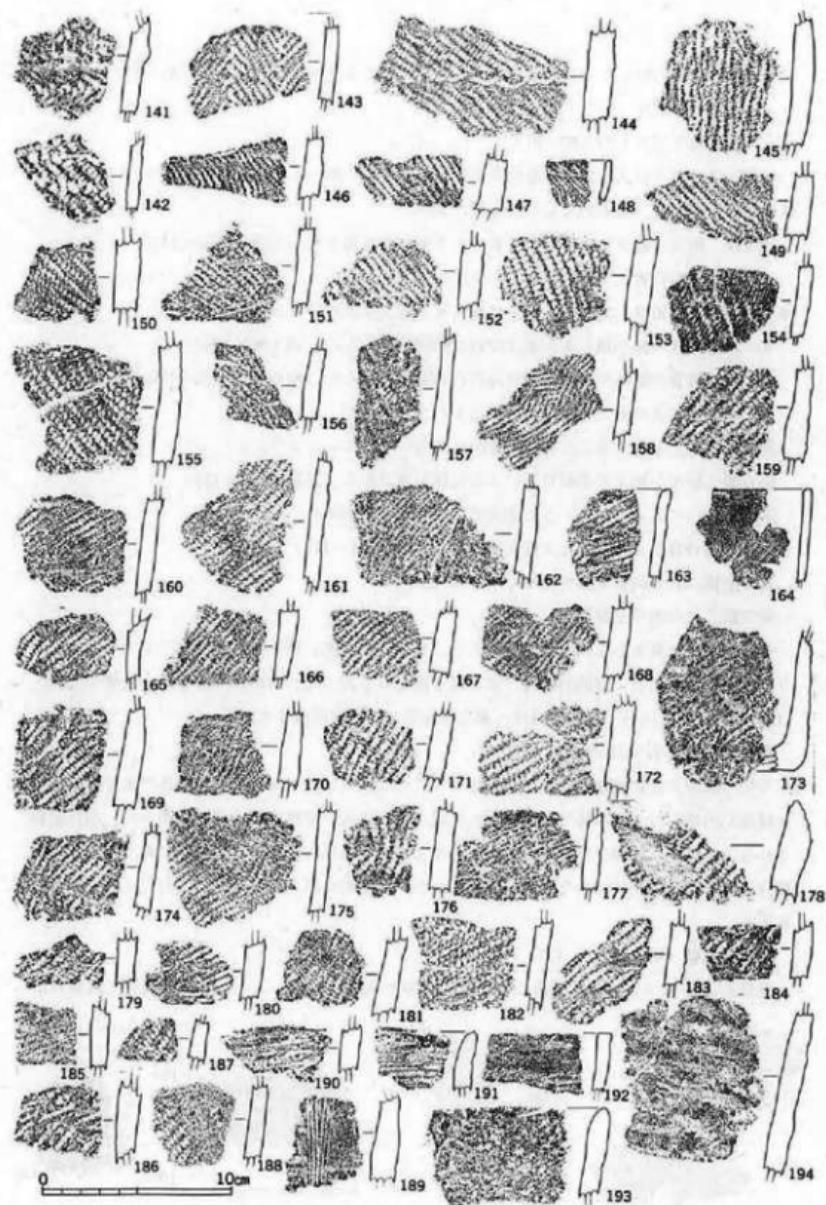
第7図 縄文土器 1 (1/3)



第8図 縄文土器 2 (1/3)



第9図 菱文土器 3 (1/3)



第10図 繩文土器 4 (1/3)

第4類：半截竹管によりB字状あるいはそれに類する文様を施す土器群（65～91）

a 格子目文を伴うもの（65～85）

b 捷文地文等のもの（86～91）

a類では、格子目文施文の半截竹管が密なものとやや粗いもののが存在する。また、半隆起線状の半截竹管文は、扁平的なものがb類に多い。

第5類：地文に縦文を持ち半截竹管により平行文が施される土器群（92～115）

本類は、半截竹管文が横位のものと縦位に施されるものとに大別される。しかし、これは口縁部と胴部との相違であり、ここでは施文具と施文方法により3類に分類したい。

a 半截竹管の幅が狭くまた施文位置に間隔があるもの（93・96・101）

d 半截竹管の幅がやや広く施文位置に間隔のあるもの（92・94～95・97～100・102～108）

c 半截竹管文の施文間隔が密になるもの（109～115）

96は、縦縞文を有することから時期的には古いものといえよう。

第6類：地文が無文で半截竹管による文様が施される土器群（117～124）

本群はバラエティーが多いため便宜的に2分するに留めたい。

a 半截竹管により多様な文様が施されるもの（117～119）

b 全体に磨き調整が施されるもの（120～124）

第7類：その他の土器群（14～116）

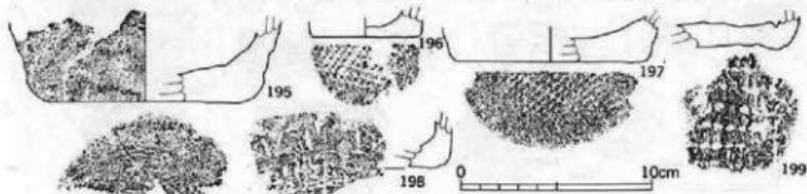
前述の6類に含まれないものを一括した。14は、やや細い粘土組を小波状にして口縁部に貼り付けたものである。時期的には、第1群土器よりも古くなる可能性もあるが、明確でない。116は、逆J字状に粘土を貼り付け、縦文を施した口縁部破片である。

第2群土器（第9図125～128～130）

今回の調査では数個体の出土しか確認されていない。128～130は、同一個体の破片である。口縁部が内湾した小形の鉢で、口縁部には縦文地文に太い沈線による文様が描かれ、赤色塗彩される。125は、後期中葉の加曾利B式系の土器で、本県では三仏生式土器と称されている。横位の沈線の間隔が狭くやや古い要素もあるが、基本的には加曾利B2式並行の土器と考えられる。

第3群土器（第9図126～127）

晩期の土器については、以前に大洞B式土器が採集されているが、今回の調査では数点に



第11図 縦文土器 5 (1/3)

留まっている。126は鉢口縁部、128は小形精製土器の破片である。後者は磨き調整が顯著で、晩期前半頃のものと考えられ、前者は中葉前後に位置付けられる。

第4群土器（第9図131～第11図199）

第1類：撚糸文を有する一群の土器（131～136）すべて縦位の絡状体による撚糸文が施される。

第2類：加飾的な繩文あるいは特殊な繩文を有する一群の土器（137～145）

- a 横羽状文が施されたもの（141）
- b 縦羽状繩文が施されたもの（143）
- c 綾繩文が施されたもの（144）
- d 斜繩文の原体が崩れ無節になったもの（137～139）
- e 異条斜繩文で施文されたもの（140）

第3類：R L斜繩文を地文とするもの（142～145～157）

第4類：L R斜繩文を地文とするもの（158～188）

第5類：その他の地文（189～194）

- a 条線文が施されたもの（189）
- b 無文その他（190～194）

第6類：底部（195～199）

- a 網代痕を残す底部（195～199）
- b 網代痕を残さない底部
- b 石 器（図版10～11～1～28）

今回の調査で出土した石器類は概して少なく、磨製石斧、打製石斧、石錘、磨石、石皿等であり、石鎌等狩猟に係わるものは確認できなかつた。これら石器類で特に注目されるのが石錘の出土量である。剣野A遺跡でも大形の石錘が多く出土したことが報告されており〔品田・鈴木1987〕、当該遺跡群における一つの特徴と言えるのかも知れない。

繩文土器出土位置一覧表

出 土 位 置	土 器 番 号
B-14, S K-1	1～5
D-13①, ピット群	6～7・9
D-13②, S K-1	10～11
B-14トレンチ	8・13・17・96・109・131・144
B-18⑤	21
C-11トレンチ	15～16・100・117・126・136・138・140・145・178
C-16⑤	12・14・18・32・73・78・90・95・124・139・146・150・190～191・199
C-18⑤	141・197
D-13①	45・50
D-13②	19・101・108・114・167・174
D-13③～⑤	26・113・115
D-15⑤	70
D-15⑥	20・23～24・29～30・37・39・41～44・46・49・52・55・57・63・68～69・77・81～82・84・86・88・91・98～99・112・120・122～123・132～134・149・158・160・166・169～173・182～183・186・194・196
D-16③	65・193
D-16⑤	25・27～28・31・33～34・36・40・53・54・56・58・62・67・71・74～76・79・80・83・85・87・92～94・97・103～104・106・110～111・119・121・127・135・143・147～148・151～157・165・168・176～177・179～181・184～185・187～188
D-16⑥	65・193
E-18①	61・163～164・189・192・195
E-18⑤	107・125
E-19⑤	118
F-17①	22・47～48・51・59～60・66・89・102・105・116・128～130・137・142・161・162・175
I-14トレンチ	64・72・196
J-19③, S X-9	38
L-14トレンチ下層	35

2 平安時代

平安時代の遺物は、M-12グリッド出土が大半を占め、その中でもS R-1炉址状造構から集中して出土しており、他の調査区内からは数片でしかなかった。出土遺物のほとんどを土師器が占め、須恵器は細片が少量出土したのみである。土器以外では鉄滓の小塊が數十点が炉址状造構内及びその周辺から出土している。出土量はコンテナに1箱程度と、調査面積が15m²の割りには多かった。時期的にはかなり短期的で、概ね10世紀中葉前後を主体としている。

a 土師器 (第12図1~12・15~33)

器種は、壺・椀類と小形甕の他は鍋や甕類が少量出土しているのみで、やや片寄った組成であった。この他には、黒色土器B類が若干伴っていた。成形はすべてロクロによっており、切り離しはすべて回転糸切りである(23~33)。

壺・椀類 (1~6) 器形や法量あるいは胎土等により3類に分類される。

a類 口縁部の端反りが強く焼成等もしっかりしたもの (1~3)

口縁部の端反りは、外側を強くナデ調整をした結果であり、口縁下部に比較的明瞭な段を持っています。径高指数が約35.8と大きい椭円的な2と指数29前後で平均的な1・3の2類に細分される。胎土では、2はb類に近く、またb類でも端反り傾向の4などの存在は両者の関係が密接なことをうかがわせている。色調は明褐色を呈する。法量は1:口径13.6cm、2:口径12.0cm、3:口径12.0cm、器高3.5cm、底径6.0cmを計る。

b類 口縁部や底部の造りが概して雑で全体に丸みを持ったもの (4~5)

径高指数は、4が27.7、5は29.8と、a類の1・3と近い数値を示す。色調は橙色を呈し、焼成はやや不良であった。法量は、4:口径11.4cm、器高3.7cm、底径5.6cm、5:口径11.9cm、器高3.3cm、底径5.9cmを計る。

c類 小形で碗状の器形のもの (6)

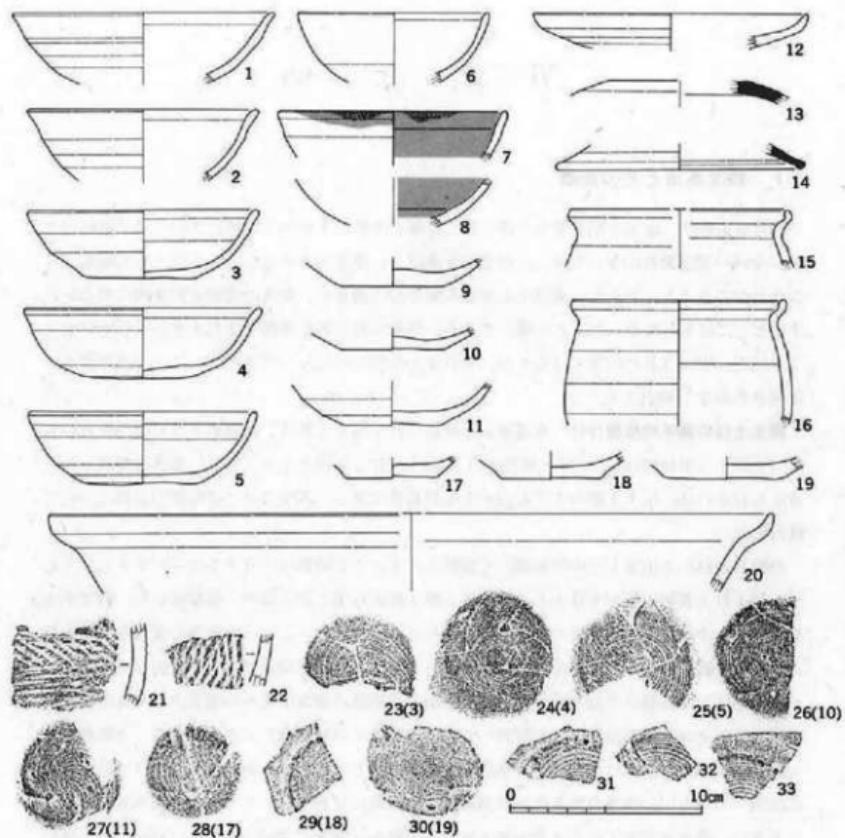
口縁部が内湾しながら立ち上がる。色調は明橙色を呈し、焼成はあまり良くない。口径約10.0cmであった。径口指数は約40.0である。

黒色土器 (7~8) 出土量はそれほど多くなく、また破片も小さいことから個体数もそれほど多くはないものと考えられる。内面は丁寧なミガキ調整後黒色処理がなされ、また口縁部にはタール状の付着物が認められる。7の口径は約12cmを計る。

皿類 (12) 口径14.4cm、現高1.8cmを計る。形態から蓋の可能性もあるが、これにともなり身がないことから皿としておく。焼成は良好で、胎土や色調等は壺a類に類似する。

甕類 (15~16・21~22) ロクロ成形の小形甕及びロクロとタタキによる甕がある。後者は、小破片しかなく形態をうかがえ、また図化できるものはなかった。個体数自体も少ないものと判断される。小形甕は、口唇部が屈曲して立ち上がるもので、口径は概ね11cm前後である。

鍋類 (20) 小片1個体が確認できただけであり、少ない器種と言える。ロクロ成形によるもので、口径約38cmと推定される。焼成は不良で明褐色を呈していた。



第12図 平安時代の土器 (1/3)

b 積層器 (第12図13~14)

器種としては、環頸（無台环）と蓋が出土しているが、前者の焼成は非常に悪く、また細片であつたため固化できなかった。出土量もきわめて少なかつた。

坏 蓋 (13~14) この2点は同一個体と考えられる。口径約13cmと推定される。口唇部の折り返しは、やや扁平につぶれている。天井部にはヘラ削りがなされるが、皿に粗く撫でたようで、その痕跡は明瞭でない。

c 鉄 淬 (国版12d-1~13)

M-12. S R-1周辺から大半が出土し、土師器等と混在していた。大きな塊ではなく、小さな物で占められ、鍛冶津と考えられる。

VI まとめ

1 繩文集落とその変遷

剣野B遺跡は、縄文中期前葉を主体とした集落と漠然としながらも想定されてきた遺跡である。今回の確認調査においては、この想定を確認し、確実なものとしたことは大きな成果とすることができよう。しかし、遺跡中心部のみ集中的に調査し、集落の実態を具体的に明らかにすることには至らなかったことも確かであり、今後に残された課題もまた大きいものといえよう。以下、限定された結果ではあるが、それなりに明らかになった点について、今後の調査・研究のため少し検討したい。

縄文土器の編年的位置付け 本遺跡から確認された縄文土器は、前期前半の可能性を持つ数片の土器片（第10図141）や後・晚期の土器もそれなりに出土しているが、集落を形成したと考えられるのは、出土土器の大半を占める中期前葉である。本項ではこの時期の土器について検討したい。

剣野B遺跡から出土した中期前葉の土器群は、大きく2時期に区分することができる。それは、第1群土器第1類を主体とした一群と、第2群から第7群土器の一部を除いた一群である。後者には、中期中葉に下るものと前者に含まれるものがある。ここでは集落の変遷を大きく捉えるという観点から、前者を中期前葉第1期とし、また後者を同第2期と便宜的に呼称する。

新潟県における最近の編年の研究は、見附市羽黒遺跡の調査成果から縄文中期全体の編年の大枠が設定され、前葉段階では剣野E一上野一古屋敷との変遷觀が示されている〔寺崎1982〕。しかし、羽黒遺跡自体は中葉から後葉段階の遺跡であることから、前葉については十分な検討には至っていない。西蒲原郡巻町豊原遺跡は、沼沢地に立地していたことから包含層は2.5mにも及び、縄文早期後半から中期中葉までの土器群が分層的に調査された〔小野・前山ほか1988〕。中期前葉については、V群からVII群1期までの4群が認識された〔小野・前山1988〕が、北陸の新保式に対応する剣野E式を3細分した資料は比較的多いものの、新崎式段階以降は資料が少なく、前葉段階全体の検討には至っていない。

北陸地方における新保・新崎式期の土器編年は、新保式が石川県徳前C遺跡や真脇遺跡の調査成果から概ねI～III期に区分され〔西野1983・加藤1986〕、また新崎式も同様3期程度に細分される傾向にある〔山田1986〕。前者は、豊原遺跡で細分された剣野E式の古・中・新的各段階に概ね対応する。また後者は、最近検討が進められてはいる〔寺崎1988〕が、土器様相の差異が顕著となることもあって十分な対応関係を確定するまでには至っていないため、ここでは從来の2期区分のままでし、中期前葉を5期に区分して検討を進めたい。新保式及び新崎式は共に真脇遺跡の編年觀に基づくものとする。ただし、新崎式のIII期については今回は除外し、

新保式Ⅲ期と新崎式Ⅰ期の区分にも未消化の部分が多く、これらはすべて今後の課題としたい。

以上、北陸地方を基軸に中期前葉の編年観を述べてきたが、剣野B遺跡における2時期の土器群について豊原遺跡の土器群〔小野・前山1988〕と対比しながら北陸と対応させ、編年的な位置付けを試みたい。中期前葉第1期の土器群は、豊原遺跡のV群やVI群の土器群に類似が多く、主体的時期は新保式のI～II期に概ね対応するものと考えられる。また中期前葉第2期の土器群は、豊原遺跡のVII群やVIII群1期との関連性がうかがえる。しかし、第2期の土器群で主体的な第1群土器第2類bや第4類aが豊原遺跡では皆無であり、中心的な時期が一段階下ると考えられることから、新崎式Ⅰ期を中心とし新保式Ⅲ期から新崎式Ⅱ期の範囲で把握されるものといえよう。

縄文集落 剣野B遺跡出土土器群からは、前後2期の主体的時期が存在することが明かとなった。この両期は、ともに中期前葉段階に包括されるが、連続的な変遷ではないと考えられる。三島郡出雲崎町タテ遺跡は、新保式期後半の比較的単純な遺跡であり〔新潟県文教委1985〕、時期的には豊原遺跡のVII群を主体としている。剣野B遺跡中期前葉第2期の土器群と対比すると、重なり合うような土器も多く認めることが可能であるが、正格子目文がほとんど存在せず、第2期の主体的時期の前段階に位置付けられるものと考えられる。これらのこととは、剣野B遺跡中期前葉第1期と第2期との間には、断絶とはいかないまでも一時期衰退した期間が存在したことを見抜している。剣野B遺跡に近接する剣野E遺跡は、遺物の出土量こそ少ないが、新保式のI期～Ⅲ期にわたる土器群が存在し、また隣接する剣野A遺跡にも同時期の土器群が存在しており、剣野B遺跡における集落等の理解に当たっては、それら周辺の遺跡との関係を考慮しつつ作業を進める必要がある。しかし、今回は制約が多いことから、剣野B遺跡内の動向を考察するに留めたい。

まず、2期に区分した土器群の分布から各時期における集落空間を想定したい。第1期の土器群の分布は、出土グリッドを掲げると、北からC-11・D-13・B-14・C-15・D-15・B-18の6グリッドとなる。調査区は僅かであるが、各グリッドはすべてA沢を中心に巡っていることが看取され、第1期のエリアとすることができる。当該期の土器は、大半が土壤やビット等からの出土であり、遺物だけではなく遺構をともなうことは明かである。住居址の確認には至らず、情報量が少ないことから断定は危険であろうが、少なくとも第1期には小規模な集落的空間がA沢を巡る範囲に存在していたことが想定できるだろう。

第2期の集落についても、遺物の分布からその範囲を想定したい。当該期の土器が主体的に出土したグリッドは、C-16・C-18・D-13・D-15・D-16・E-18・E-19・F-17等であり、もっと多く出土したのがD-15・D-16の2グリッドであった。この他に遺物量は概して少なく資料の図化に及ばなかったものの遺構が存在するグリッドがある。それらを総合的にみると、第1期のエリア南半から広がる平坦地全体に及ぶ傾向を把握することができる。また、それら遺構・遺物が検出された範囲にありながら、C-19・C-20ではそれらが全く検出できなかった地区がある。この2グリッドは、今回調査した区域の南辺に相当することから

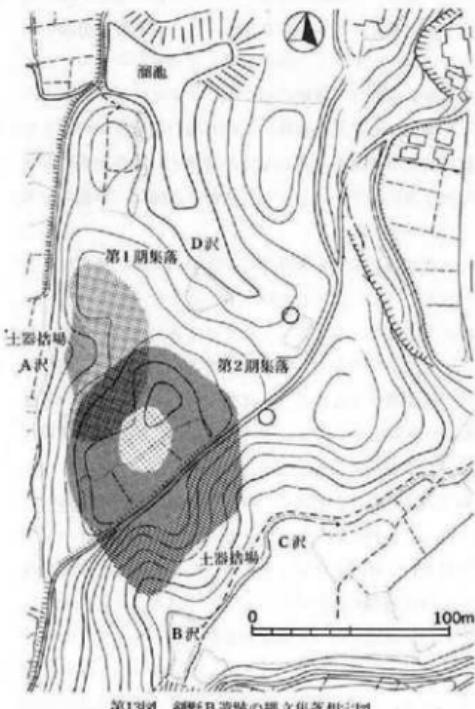
遺跡範囲の境界ということも考えられなくはない。しかし、B沢一帯にはかなり良好な土器捨て場（廐棄場）の存在が既往の調査等で明かにされており、遺構や遺物包含層の分布は、平坦地一帯に広がっていると想定することに妥当性がありそうである。また、遺構・遺物の検出されなかった個所は、集落中心部の広場的な存在であった可能性が考えられる。

各期の集落範囲等の想定は以上であるが、概念的にまとめたのが第13図である。遺構あるいは遺物等が出土した小規模なまとまりは、C沢の上部やD沢頂部の緩傾斜面があり、特に後者からは住居址と考えられる遺構が検出されている。出土遺物が少なく、また無文土器が多かつたため時期は明確でないが、第7図35の土器を代表とすれば、新保式Ⅲ期の所産である可能性が強く、第1期から第2期に至る過渡期の集落が存在することも考えられる。

住居と墓 今回の調査によって確認された遺構には、土壇と炉址や柱穴（ピット）の並びから住居址と考えられる多くの遺構が検出された。墓坑として可能性の強い事例は、第1期ではD-13②、SK-1が存在する。しかし、第2期については、遺構自体が未発掘のため不明な点も多くあるが、調査段階の所見ではそれらしい遺構プランの確認はなされていない。本遺跡

第2期と類似した集落景観と考えられる遺跡として、南魚沼郡塙沢町の五丁歩遺跡が掲げられる〔新潟県教委 1987〕。この遺跡も環状に住居が取り巻き、中央に広場的な空間が設定されているが、墓域はその中に位置している。剣野B遺跡においても、広場的な空間が想定されるが、この空間の存在が確かであれば第2期の墓域が存在する可能性は高いであろう。

住居址は、発掘区が 2×2 mと狭いことから全貌を明らかにした例はないが、基本的には地床炉をもちやや丸身を持ったプランに柱穴が巡るものと想定され、地下への掘り込みは非常に少ない。炉址については、石圓炉でないことが大きな特徴として掲げられ、北陸的な影響の強い新崎式期（古段階）までは地床炉が一般的であったことを物語っているといえよう。



第13図 剣野B遺跡の縄文集落想定図

2 鍛冶遺構の年代と鉄生産関連遺跡

剣野B遺跡M-12グリッドから検出された炉址状遺構は、炉面等から出土した鉄滓から小鍛治等に係わる遺構と考えられる。本節においては、当該遺構の年代と、周辺地域に分布する製鉄関連遺跡について概観し、今後の調査・研究への指針をしたい。

年代 M-12. SR-1には、鉄滓の小塊とともに比較的まとまった土器群が伴っていた。これらは、その出土状態から時期の限定された一括性の高い資料と考えられ、当該地域における基準的な土器群となり得る。当該土器群の組成は、土師器を主体に僅かに須恵器を伴い、また若干の黒色土器が共存する。土師器の器種構成は、供膳形態である壺・椀類を中心に小形甕や甕、鍋といった煮炊具が付く。

壺・椀類の形態的特徴は、口縁部が端反的なa類と全体的に丸身を持ち底部の造りがやや粗雑化するb類が存在することである。a類は、上越市一之口西遺跡のSE-153出土土器〔新潟県教委 1986〕と概ね対比されると考えられ、またb類は上越市下新町遺跡〔新潟県教委 1984〕に類似したものを認めることができる。一之口西SE-153出土土器群の編年的位置付け〔坂井 1986〕については、坂井秀弥氏によって再検討が進められており、氏の御教示によればその実年代は10世紀第3四半期頃に位置付けられるという。須恵器については、少量・細片のため具体的な検討は難があるが、壺蓋は佐渡小泊窯江ノ下窯跡採集資料と類似するものがあり、本窯跡資料は10世紀前半という年代が与えられている〔坂井 1989〕。以上のことから、M-12. SR-1に伴って出土した土器群の年代は、概ね10世紀中葉前後を中心とした年代が想定できる。

鉄生産関連遺跡 柏崎・刈羽地域は、9世紀初頭に古志郡から分置・独立して三嶋郡となつたが、10世紀以降は王朝国家体制の中にあって、さらに自給的様相を強くする。在地生産が主要であった土師器は、このような背景から地域色を強め、他地域との単純な対比は難しくなることが考えられる。

在地性といった傾向は、鉄あるいは鉄器生産においても同様に指摘されることかも知れない。柏崎市域における製鉄に関連する遺跡や地名は、規模等や詳細は不明であるが、東部丘陵や南部丘陵及び鶴川下流西岸域という3地域に分布する。これらの中でもっとも遺跡数の多いのが剣野山を中心とした鶴川下流西岸域である。製鉄遺跡としては、剣野水上遺跡や泉山遺跡、またやや南に位置する西田・鶴巻田遺跡群が知られている。また小鍛治遺跡については剣野沢遺跡が存在したが、今回これに剣野B遺跡例が加わることとなった訳である。剣野沢遺跡例の年代観は不明であるが、共に隣接した遺跡であり両者の関係はかなり深いものと推定される。

M-12. SR-1は、D沢頂部の緩斜面に位置する。D沢については、充分な調査を実施することができなかつたが、沢内には中・近世の溜池が構築されており、水利的にも便が良かったことが考えられ、幾つかの関連遺構が存在する可能性は強いように思われる。今後の調査等によっては、工人等についても把握することもできると考えられ、炉址の検出は重要な意義を持つものといえるだろう。

〈引用・参考文献〉

- 石川県埋蔵文化財センター 1983「鹿島町徳前C遺跡調査報告(N)」国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡鹿島町徳前C遺跡第4次緊急発掘調査報告一』
- 伊藤恒彦・品田高志 1988「劍野A遺跡採集の旧石器時代遺物について」『柏崎市立博物館館報』No.2 新潟県柏崎市立博物館
- 宇佐美篤美 1979「劍野遺跡」新潟県柏崎市教育委員会
- 宇佐美篤美・寺崎裕助 1987a「劍野B遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』新潟県柏崎市史編さん委員会
- 宇佐美篤美・寺崎裕助 1987b「劍野F遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』新潟県柏崎市史編さん委員会
- 岡本都栄 1987「劍野D遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』新潟県柏崎市史編さん委員会
- 小野 昭・前山精明 1988「巻町農原礦文時代低湿地遺跡の調査」『第4回研究発表会一新潟県の考古学一発表要旨』同研究発表会実行委員会
- 小野 昭・前山精明ほか 1988「巻町農原遺跡の調査」『巻町史研究』N 新潟県巻町
- 柏崎市教育委員会 1988「劍野沢遺跡一住宅用地造成にともなう確認調査報告書一」
- 柏崎市教育委員会 1990「千古塚一新潟県柏崎市・千古塚遺跡発掘調査報告一」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11)
- 柏崎市史編さん委員会編 1987「柏崎市史資料集考古篇1 考古資料(図・拓本・説明)」
- 加藤三千雄 1986「第3群土器・新保式期」『石川県能登町真脇遺跡一農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書』石川県能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査團
- 金子拓男 1967「新潟県柏崎市劍野E地点遺跡出土遺物について」『信濃史』第19卷第2号 信濃史学会
- 金子拓男 1987「劍野E遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』新潟県柏崎市史編さん委員会
- 坂井秀弥 1986「平安時代中期の土器」『北陸自動車道上越市春日・本田地区発掘調査報告書II(一之口遺跡西地区)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集) 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989「奈良・平安時代の土器」『新新バイパス関係発掘調査報告書(山三賀II遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集) 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・岡本都栄 1987「柏崎農業高等学校校庭遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』 新潟県柏崎市史編さん委員会
- 品田高志 1987a「劍野C遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』 新潟県柏崎市史編さん委員会
- 品田高志 1987b「十三古塚遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』 新潟県柏崎市史編さん委員会
- 品田高志 1989「柏崎市・田尻1号木灰窯」『新潟考古学講話会報』第3号 新潟考古学講話会
- 品田高志 1990「方形区画溝の性格と『場』の観念について」『千古塚一新潟県柏崎市・千古塚遺跡発掘調査報告一』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11) 新潟県柏崎市教育委員会
- 品田高志・鈴木成俊 1987「劍野A遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』 新潟県柏崎市史編さん委員会
- 寺崎裕助 1982「鐵文中期の土器について」『羽黒遺跡』新潟県見附市教育委員会
- 寺崎裕助 1988「新潟県長者ヶ原遺跡出土の繩文土器」『新潟考古学講話会報』第2号 新潟考古学講話会
- 中野豈任 1988「安楽寺経塚出土「紙本妙法蓮華經」の奥書」『越佐研究』第45集
- 新潟県教育委員会 1984「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告1」(今池遺跡・下新町遺跡・予安遺跡) (新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集)
- 新潟県教育委員会 1985「国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書(タテ遺跡)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第39)
- 新潟県教育委員会 1986「北陸自動車道上越市春日・本田地区発掘調査報告書II(一之口遺跡西地区)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集)
- 新潟県教育委員会 1988「北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(西田・鶴巻田遺跡群)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第27)
- 西野秀和 1983「縄文時代について」『鹿島町徳前C遺跡調査報告(N)』石川県立埋蔵文化財センター
- 藤巻正信 1987「桐山・鶴巻田・西田遺跡」『柏崎市史資料集考古篇1』新潟県柏崎市史編さん委員会
- 山田芳和 1986「第9群土器・新崎式期」『石川県能登町真脇遺跡一農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書』石川県能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査團



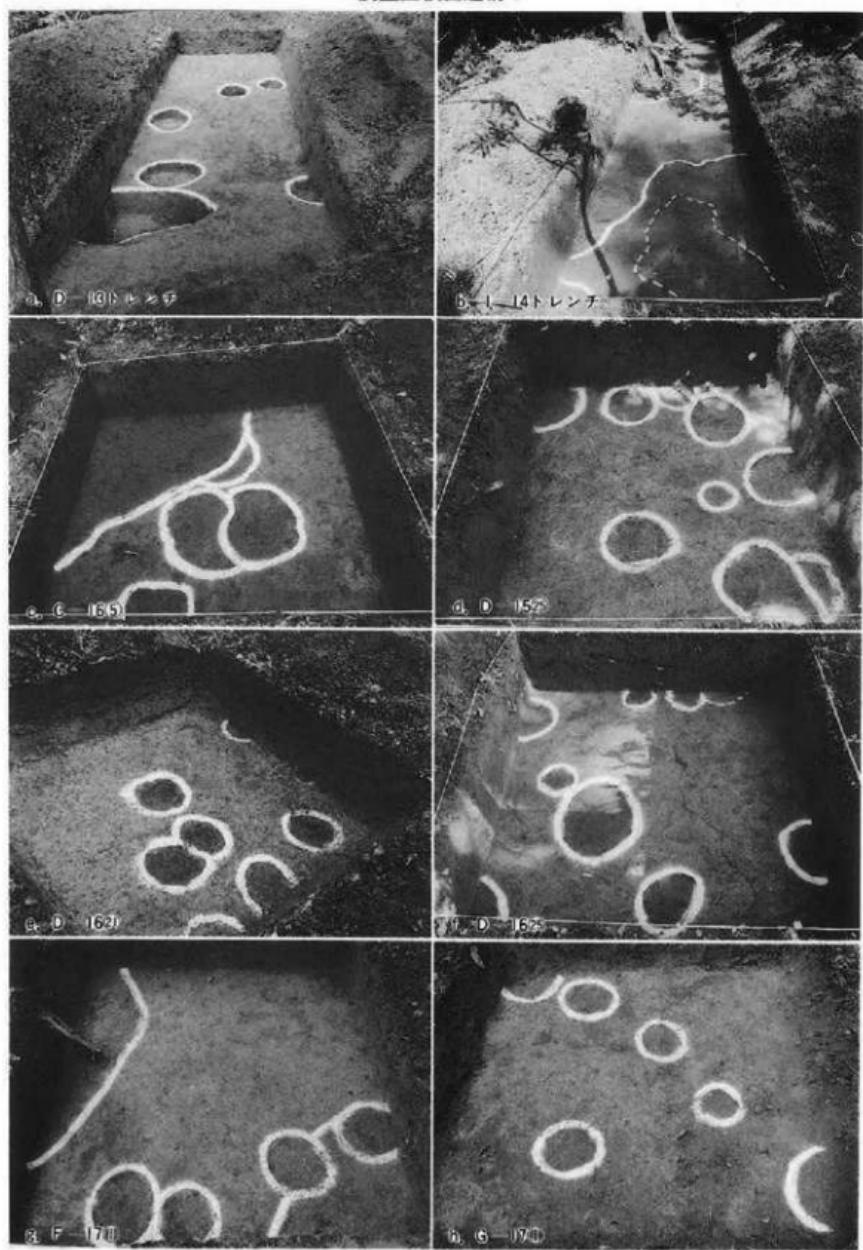
剣野B遺跡とその周辺 (1 : 15,000) 1964.10.27撮影

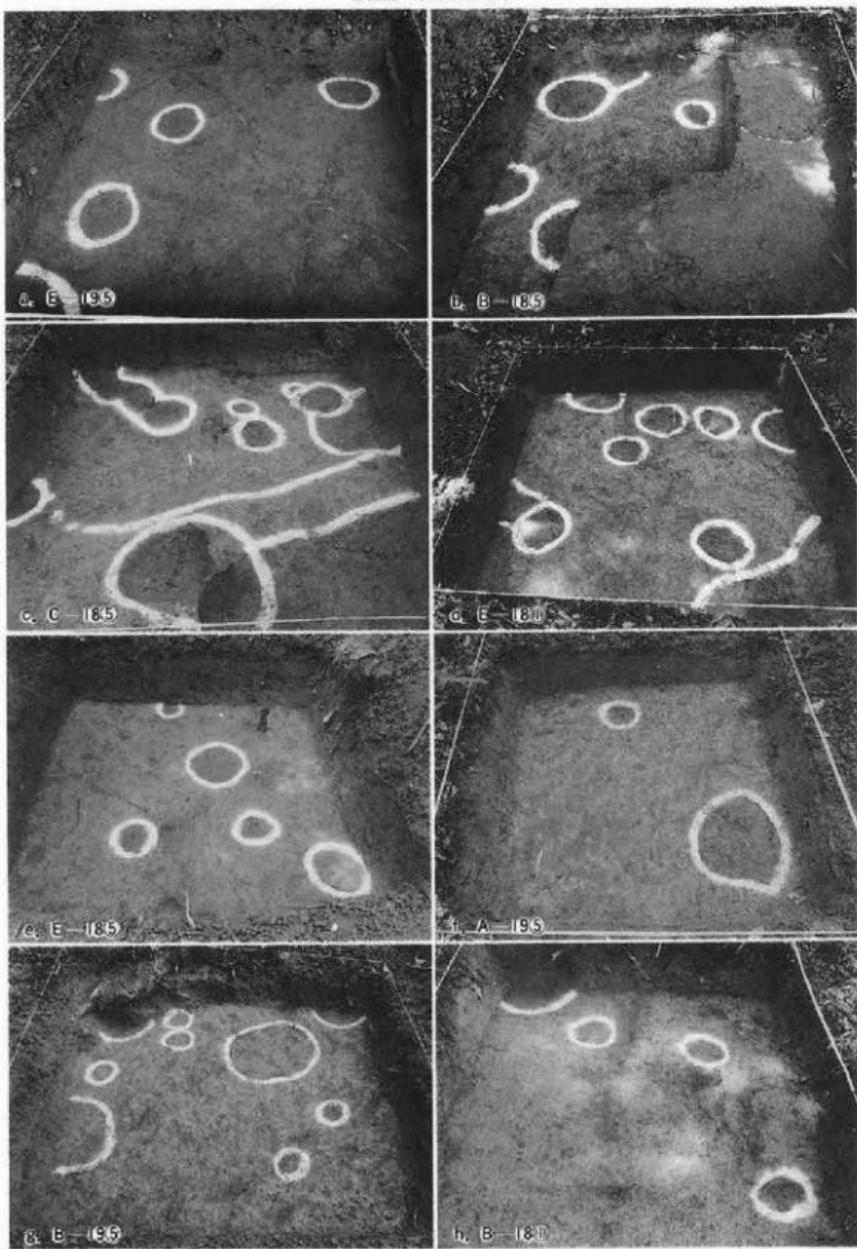
図版 2

剣野日遺跡

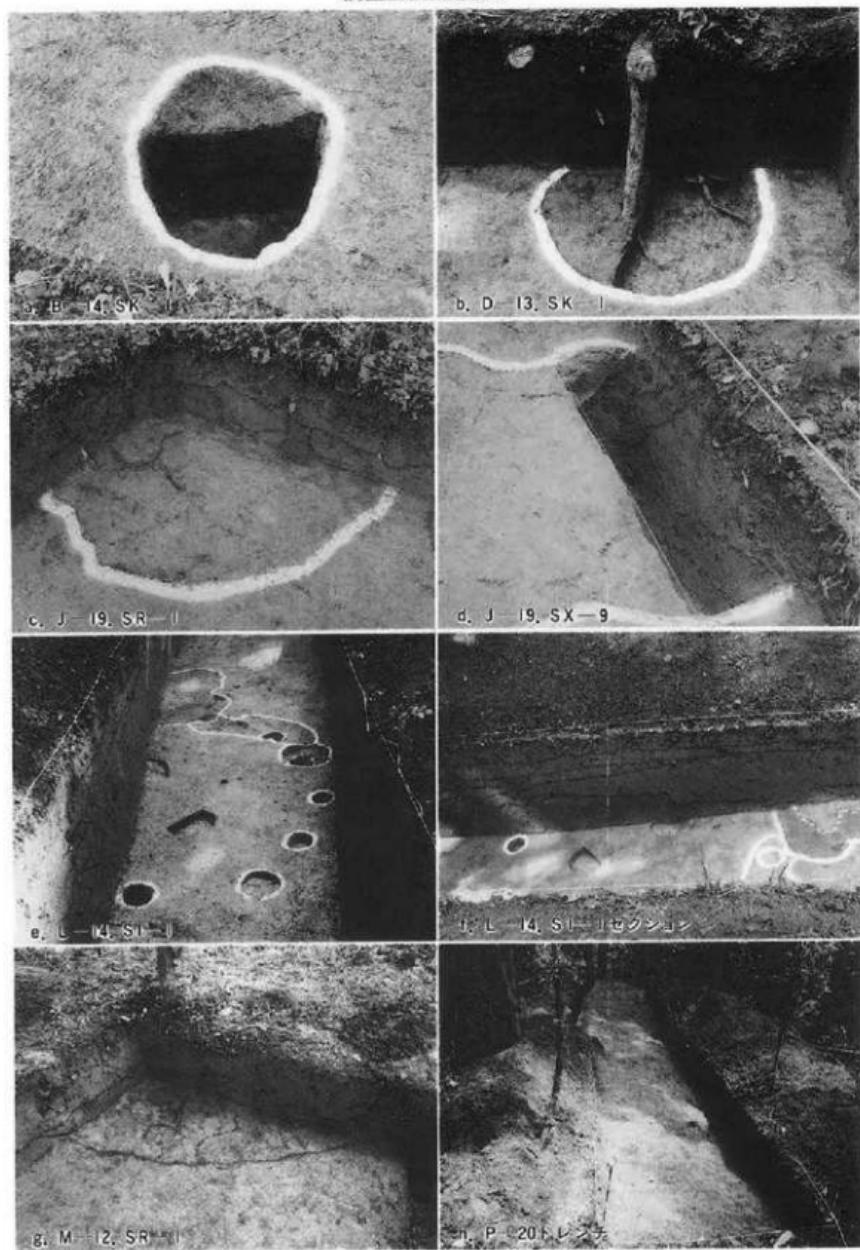


調査区検出遺構 1





調査区検出構3



図版 6

剣野山塚群



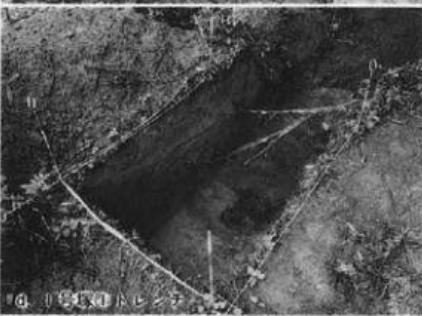
A. 剣野山跡現況(北部)



B. 剑野山跡現況(北部)



C. 1号塚3トレンチ



D. 1号塚3トレンチ



E. 1号塚2トレンチ



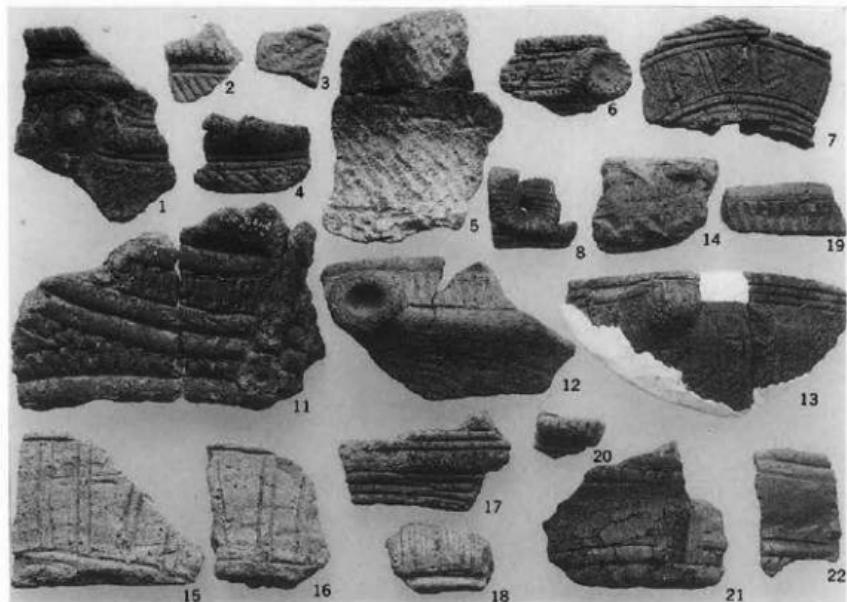
F. 1号塚4トレンチ



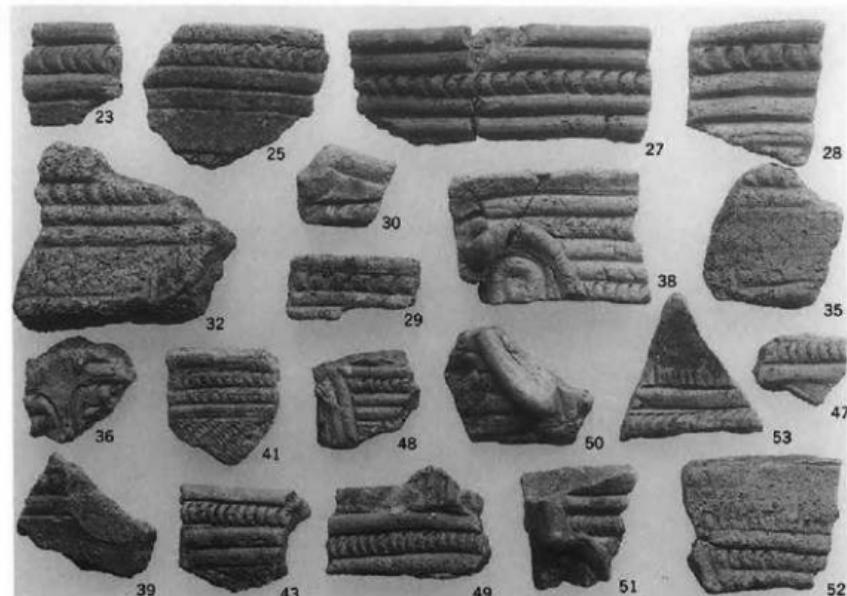
G. 2号塚2トレンチ検出遺構



H. 2号塚5トレンチ

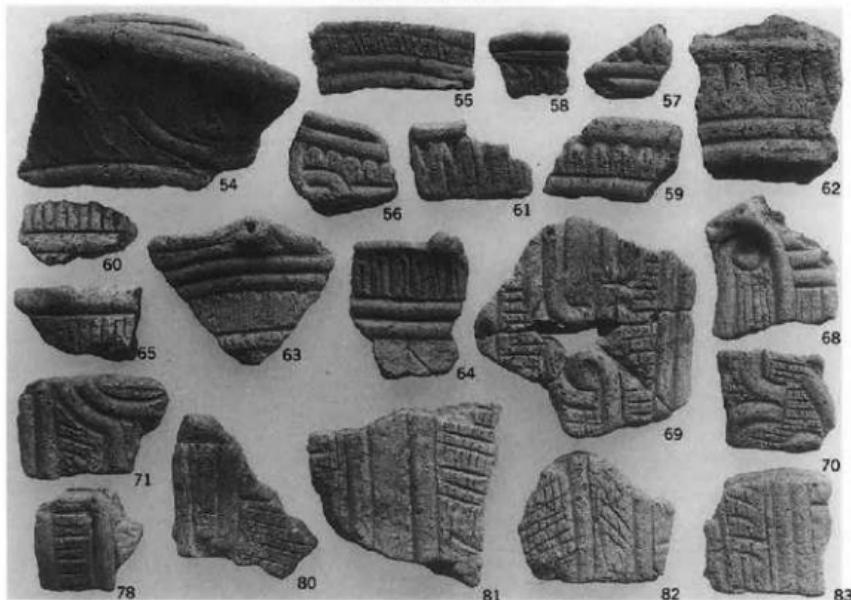


a. 縄文土器 1

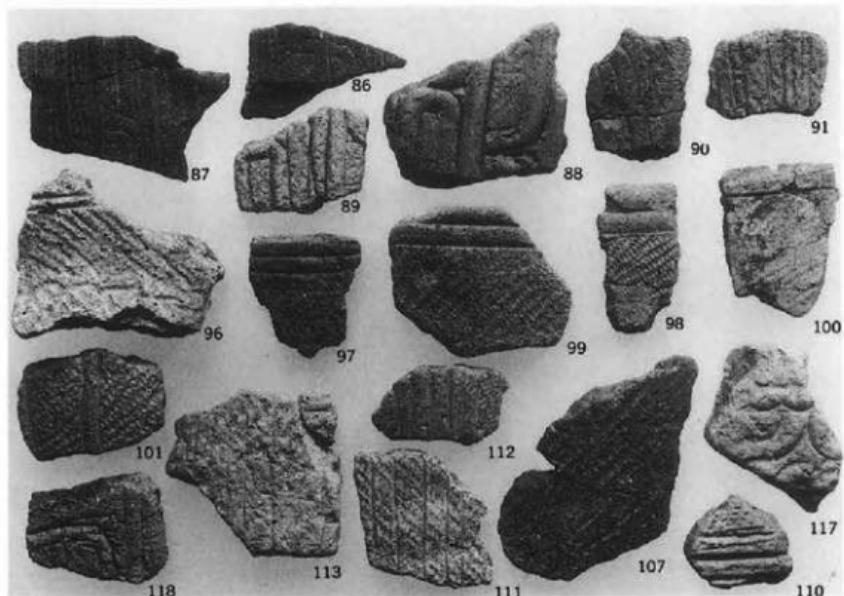


b. 縄文土器 2

縄文時代の遺物2



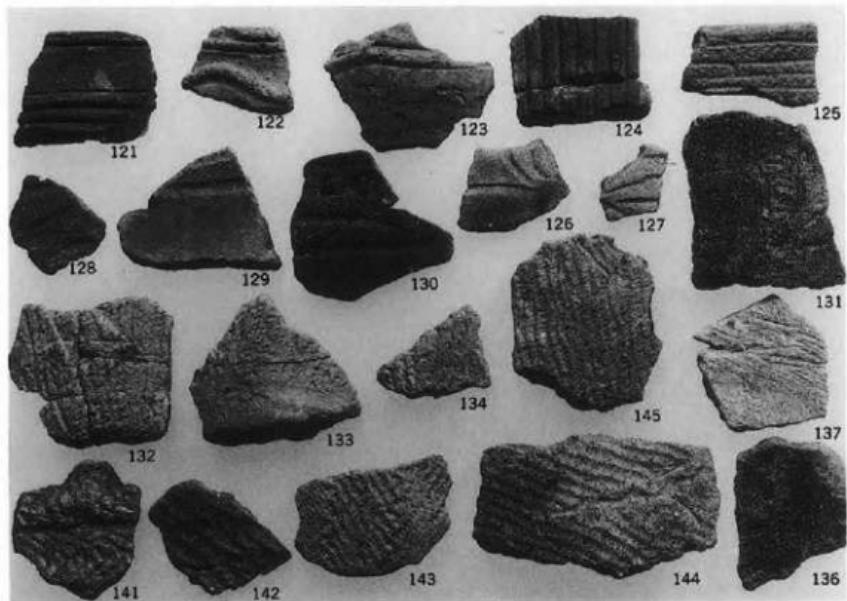
a. 縄文土器3



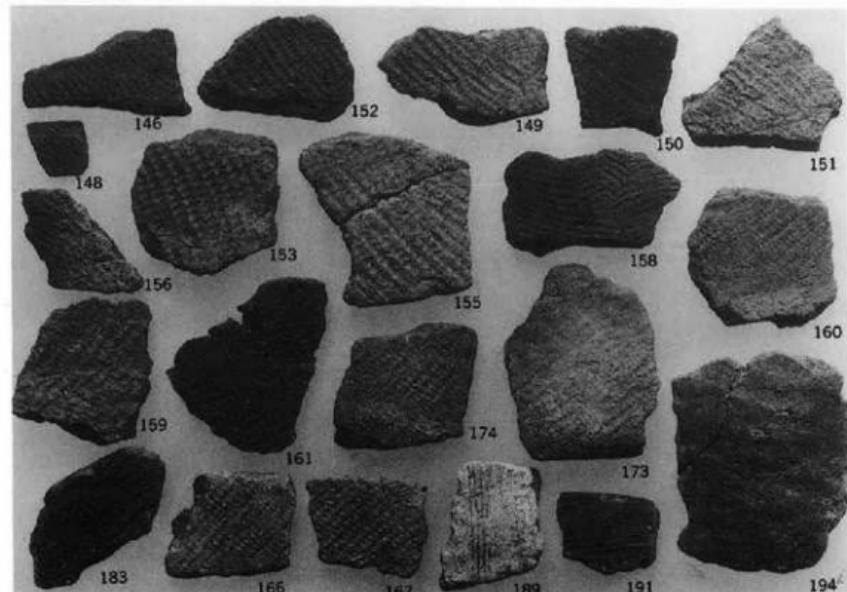
b. 縄文土器4

縄文時代の遺物3

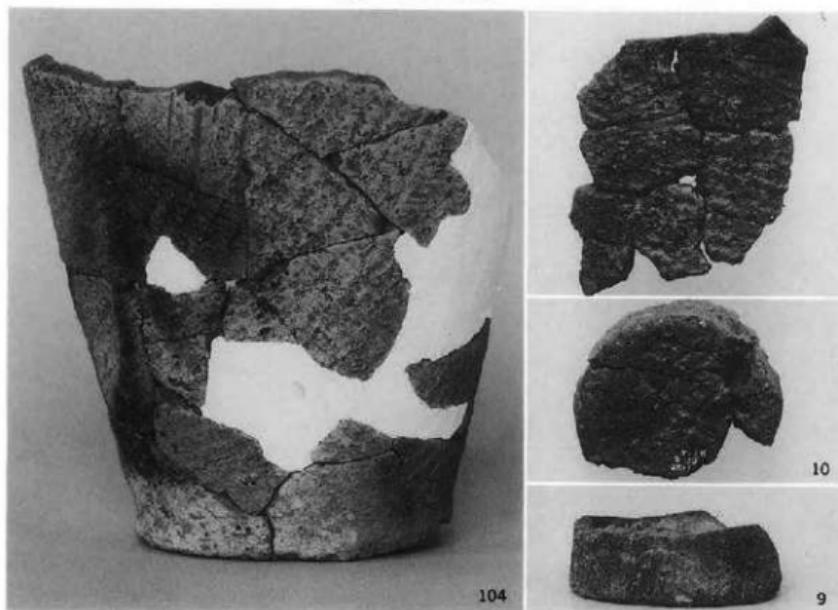
図版9



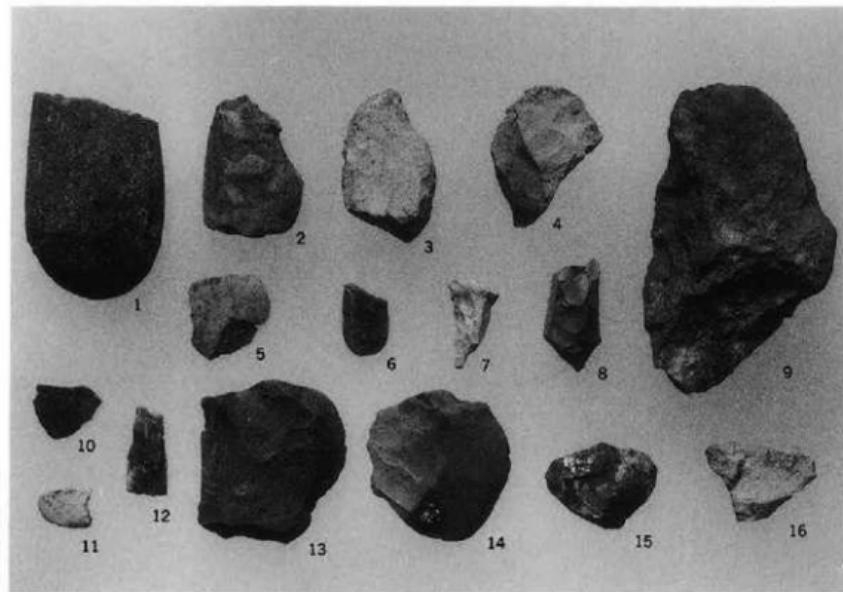
a. 縄文土器5



b. 縄文土器6

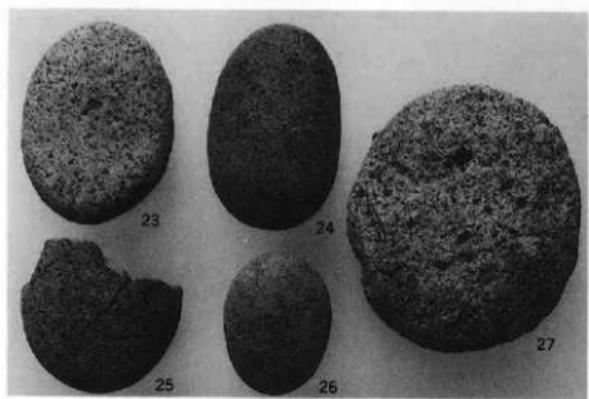
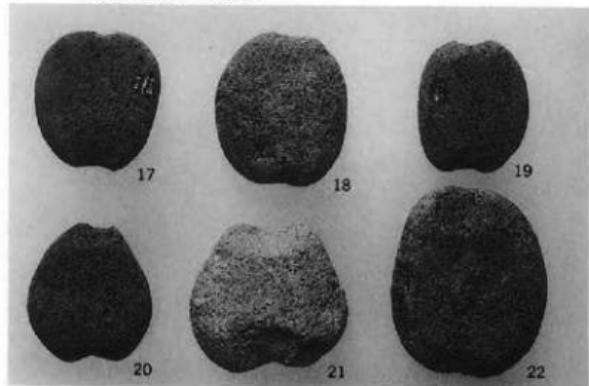


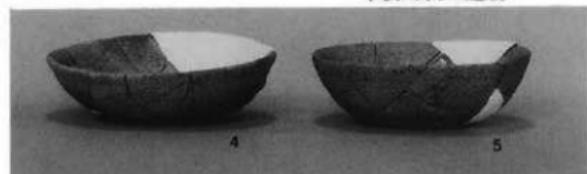
a. 縄文土器 7



b. 石器類（磨製石斧・打製石器・剝片ほか）

縄文時代の遺物 5

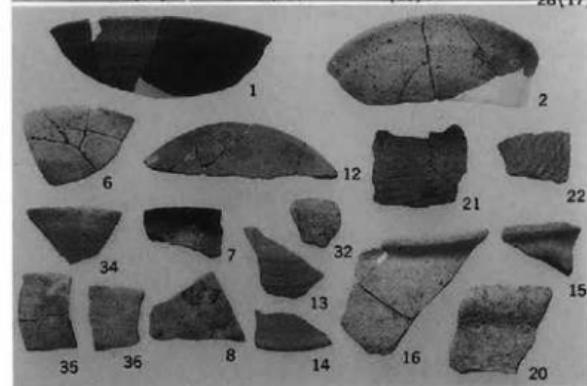




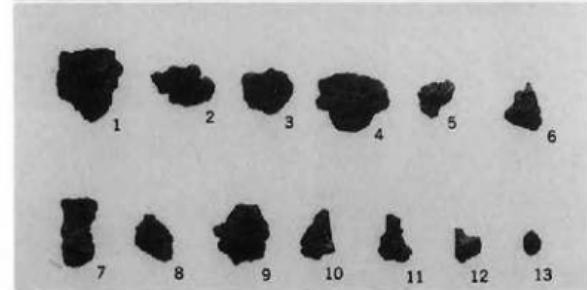
a. 土器器



b. 土器器



c. 土器器・黒色土器・須恵器



d. 鉄 淬

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第12

剣野山縄文遺跡群

——新潟県柏崎市・剣野B遺跡確認調査報告——

平成2年3月31日 印刷

平成2年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会
印刷 三秀社